

私立大学 学生生活白書 2003

## 私立大学 学生生活白書 2003

発行 2003年7月

編集者 学生委員会第一分科会 主査 林 久夫

監修者 社団法人日本私立大学連盟

学生委員会 担当理事 長田豊臣

委員長 大久保桂子

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-2-25 私学会館別館

TEL 03-3262-3603 FAX 03-3262-3604 (教学支援課)

企画・制作協力・印刷／株式会社ウェイヴインターナショナル

TEL 本社 06-6362-1222/東京支社 03-6226-6151

URL [www.wave-int.co.jp](http://www.wave-int.co.jp)



# 私立大学 学生生活白書 2003

社団法人日本私立大学連盟 学生委員会

進学目的・理由／充実度／期待

経済状況

ライフ

正課教育

正課外活動

不安・悩み

進路・就職

身についたこと

# Student Life Report

# 私立大学 学生生活白書 2003

## STUDENT LIFE REPORT 2003

### まえがき

日本私立大学連盟が4年ごとに実施している学生生活実態調査も、今回で11回目を迎えました。2002年秋に加盟122大学のご協力を得て、7,349人の学生諸君から回答をいただき、すでにその集計結果は配布されています。これら7,000票を超えるデータを分析し、加盟大学の学生たちの生活の実情をコンパクトに解説した「私立大学学生生活白書 2003」を、ここにお届けいたします。

今回の調査は、日本私立大学連盟が21世紀に実施した最初の学生調査でもあります。前回の1998年度調査から4年のあいだに変わったのは、世紀ばかりではありません。私立大学とその学生たちをとりまく環境も激変しています。大学は少子化の波にあらわれ、サバイバルに必死です。学生たちにとって、大学は入りやすくなつたかもしれません、出口での就職難はいよいよ深刻です。情報環境は向上しましたが、それを活用する学生たちの時間と財源には、ますます余裕がなくなっています。

このような環境の変化を、調査の実施にあたった学生委員会第一分科会も念頭におき、学生たちの「いま」の姿に肉薄できるように、設問項目に工夫を加えました。この白書でも、4年前との明らかな変化が見られる部分を、わかりやすく示したつもりです。ご覧いただければおわかりのように、最近の不況とデフレが学生の生活にも直撃を与えています。それでも学生たちは、大学の授業や課外生活に大きな期待を抱き、学生生活を充実させようという意欲を高めていることもわかりました。

この白書作成にあたっては、タイムリーな情報を速やかに、明快簡潔にお伝えすることを心がけました。データ分析に当たられた第一分科会主査の林久夫氏をはじめ、委員諸氏には、スピーディかつ密度の高い作業に敬意を表し、ご苦労をねぎらいたいと思います。調査にご協力いただいた加盟大学および学生諸君に改めてお礼を申し上げるとともに、この白書に示された学生の「いま」の「本音」を、加盟大学それぞれの改善と充実にお役立ていただければ幸いです。

2003年7月

学生委員会

担当理事 長田 豊臣  
委員長 大久保 桂子

### 目次

基本事項	2
I. 進学目的・理由／充実度／期待	4
II. 経済状況	8
III. ライフ	12
IV. 正課教育	16
V. 正課外活動	20
VI. 不安・悩み	24
VII. 進路・就職	28
VIII. 身についたこと	32
委員名簿	36
社団法人日本私立大学連盟加盟大学一覧	37
執筆者	
●進学目的・理由／充実度／期待	
石山 仁 (東北学院大学学生部学生課 課長補佐)	
●経済状況	
加藤哲史 (流通科学大学学生部 就職担当部長)	
●ライフ	
安食真城 (龍谷大学総合情報ネットワークオペレーションセンター)	
●正課教育	
大久保桂子 (國學院大学文学部教授・学生部長)	
●正課外活動	
岩田 喬 (同志社大学学生支援センター事務長)	
●不安・悩み	
松井明子 (立教大学学生部 副部長・学生生活課 課長)	
●進路・就職／身についたこと	
林 久夫 (龍谷大学理工学部教授・前学生部長)	
総合監修	
本郷 茂 (青山学院大学経済学部教授・学生部副部長)	
池本正純 (専修大学経営学部教授・学生部長)	

# 基本事項

## 「第11回学生生活実態調査」の概要

この「学生生活白書」は、本連盟の「第11回学生生活実態調査」結果をもとに作成したものである。同調査の概要を以下に記す。

### ●調査の目的

本連盟の「学生生活実態調査」は、加盟大学に在籍する学部学生の生活状況を調査し、その生活実態について的確な傾向を把握するとともに、時代の変化に応じた比較分析を行い、加盟大学ならびに本連盟の諸活動を検討する際の基礎的資料とすることを目的として、4年に1度実施されている。

### ●基本設計・質問項目

設問項目の基本的な設計にあたっては、①調査の継続性を重視し、客観的で数値化できる内容設定によって経年変化の比較分析を可能とする、②年々さまざまな変化をみせる学生生活の実態をより具体的に、またより的確に把握できるようにする、③学生生活が含まれている大学の諸改革や社会の動きとの関連にも意を注ぎ新しい環境の変化と学生生活との関連についても分析を試みる、に留意して、I 基本事項、II 大学等の選択理由、入学後の満足度、大学への期待・要望、III 経済、IV ライフ、V 正課教育、VI 正課外活動、VII 不安・悩み、VIII 進路の8分野の質問群として質問項目を設定した。

### ●調査回答者の抽出方法

調査対象がさまざまな点で集計・分析に有効かつ客観的な人数となるよう、過去2回の調査に準じて、加盟大学を所在地域・学生数規模・学部を昼夜間、下表の専攻分野により47に層化し、抽出比率が一定となるように調査対象者（サンプル）数を割り当てた。

### 専攻分野別学部系統分類

専攻分野	学部名				
人文・社会系	アジア太平洋学部	外国語学部	学芸学部	環境情報学部	観光学部
	教育学部	教養学部	現代社会学部	現代中国学部	現代福祉学部
	現代文化学部	公益学部	国際開発学部	国際学部	国際関係学部
	国際交流学部	国際コミュニケーション学部	国際社会学部	国際地域学部	国際文化学部
	国際文化交流学部	コミュニケーション学部	コミュニケーション振興学部	コミュニティ福祉学部	産業社会学部
	社会科学部	社会学部	社会福祉学部	神学部	人文学部
	心理学部	政策科学部	総合情報学部	総合政策学部	地球環境科学部
	人間科学部	人間学部	人間環境学部	人間関係学部	人間社会学部
	ネットワーク情報学部	比較文科学部	仏教学部	文化学部	文化政策学部
文学部	文芸学部	文理学部(文系)			
法律・政治系	現代法学部	国際政治経済学部	政経学部	政策学部	政治経済学部
	法学部	法経学部			
経済・経営・商学系	アジア太平洋マネジメント学部	企業情報学部	経営学部	経営科学部	経営情報学部
	経済学部	経済科学部	経済情報学部	サービス経営学部	サービス産業学部
	商学部	情報学部	流通科学部	流通情報学部	
理工系	応用情報学部	開発工学部	芸術工学部	工学部	システム工学部
	情報科学部	数理情報学部	生産工学部	生命科学部	電子情報学部
	文理学部(理科系)	理学部	理工学部		
農・水産系	応用生物科学部	海洋学部	国際食料情報学部	生物産業学部	生物資源科学部
	地域環境科学部	農学部	農獸医学部		
薬系	薬学部				
医歯系	医学部	看護学部	看護医療学部	歯学部	
家政系	家政学部	生活科学部	人間生活学部		
芸術系	音楽学部	芸術学部	造形学部	美術学部	
体育系	健康科学部	スポーツ科学部	スポーツ健康科学部	体育学部	

## 回答者の基本データ

( )内は前回調査値／1998年実施 ※…前回調査値なし(以下同様)

### 1 ●昼間部【昼間主】、夜間部【夜間主】どちらに在籍していますか。

昼間部【昼間主】:95.0% (93.1%)

夜間部【夜間主】:4.9% (6.8%)

### 5 ●あなたの出身高校等は次のどれですか。

私立:42.0% (40.5%) 海外:0.8% (0.8%)

国立:1.2% (1.0%) 大学入学資格検定:0.5% (0.4%)

公立:54.6% (56.3%) その他:0.6% (0.9%)

### 2 ●性別はどちらですか。

男性:53.8% (55.3%)

女性:45.9% (44.7%)

### 3 ●年齢は何歳ですか。 2002年4月2日現在でお答えください。

18歳:15.5% (13.5%) 24歳:1.0% (1.4%)

19歳:22.7% (20.8%) 25歳:0.4% (0.8%)

20歳:24.7% (23.4%) 26歳～29歳:0.8% (※)

21歳:21.3% (21.9%) 30歳代:0.5% (※)

22歳:9.9% (12.1%) 40歳代:0.1% (※)

23歳:2.7% (4.4%) 50歳以上:0.3% (※)

### 4 ●入学してから何年目ですか。

1年目:25.6% (24.6%) 5年目:1.1% (1.3%)

2年目:25.5% (24.8%) 6年目:0.5% (0.4%)

3年目:27.0% (27.4%) それ以上:0.1% (0.1%)

4年目:19.7% (20.9%)

### 7 ●在学中の大学へは どのような選抜方法で入学しましたか。

一般入試:54.1% (62.0%)

一般入試・センター試験併用:2.3% (0.8%)

センター試験のみ:3.6% (1.4%)

附属推薦:8.2% (9.8%)

指定校推薦:13.2% (11.6%)

公募推薦:9.6% (8.9%)

スポーツ・課外活動等推薦:2.7% (1.9%)

帰国子女入試:0.2% (0.3%)

社会人入試:1.0% (1.1%)

編入学・転入学:1.2% (1.1%)

AO入試:2.2% (※)

留学生:0.5% (※)

その他:0.7% (0.8%)

Students'Profile

# Expectations

## I. 進学目的・理由／充実度／期待

### ● 大学進学の目的

トップ3は、  
**「学歴の必要性」(45.6%)**  
**「自分探し」(41.4%)**  
**「専門性を身につける」(32.6%)**

40%以上が学歴と自分探しを回答

### ● 所属学部・学科の満足度

「入学してよかったと思う」(61.2%)  
**「よくなかったと思う」(5.9%)**

4年生で「よかったと思う」は若干増加

### ● 所属大学の選択理由

トップ3は、  
**「実力(偏差値)にあっていた」(30.7%)**  
**「自宅からの通学が可能」(28.1%)**  
**「専門の研究・教育の充実度」(23.4%)**

その他では、新しいタイプの学部・学科の設置(8.9%)

### ● 学生活の充実度

「学生生活は充実している」(68.7%)  
**「充実していない」(9.5%)**

「学生生活は充実している」層では、総じて学業の満足度も高い

### ● 大学の施設・サービスへの要望

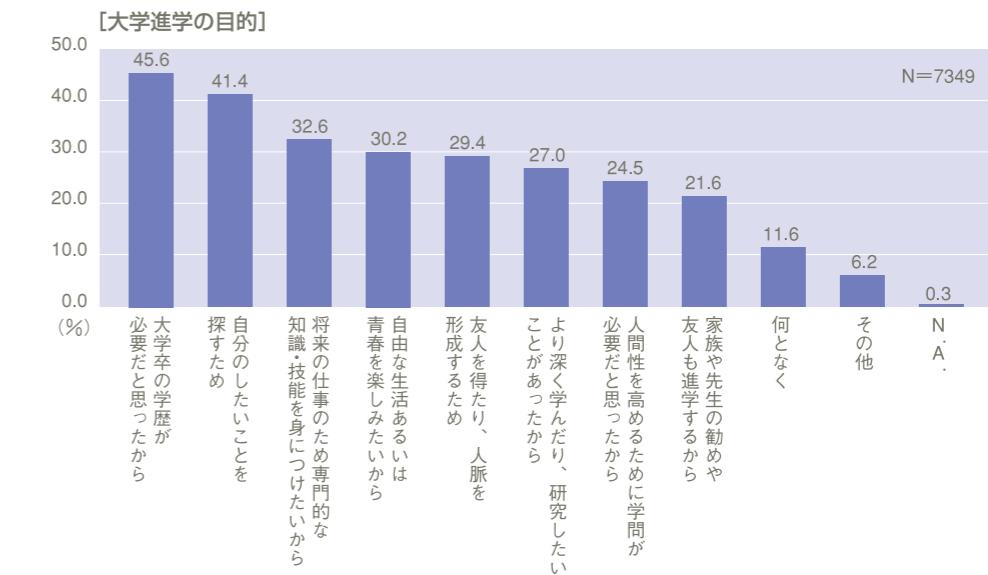
トップ3は、  
**「授業料の減額」(59.9%)**  
**「学生食堂の充実」(42.2%)**  
**「キャンパス内の居場所」(30.6%)**

その他では、生活環境面の充実に対する要望が若干強い

### ● 大学進学の目的

進学の目的では、厳しい時代の表われか「学歴が必要」がかなり高く、ともかく「学歴が欲しい」という必死な姿と現実的な側面が浮かび上がっている。しかし、「自分のしたいことを探す」が次に多く、将来何をすべきかまだわからず、大学で探し求めたい「自分探し」派が40%以上も占めている。これは入学以前に具体的な目的意識が形成され

ていない学生がかなり入学していくことを物語っていることから、今後の学生支援の方向を考えていく上で重要な示唆となると考えられる。この上位2つから約10ポイント下に「専門性を身につける」が3位につけている。

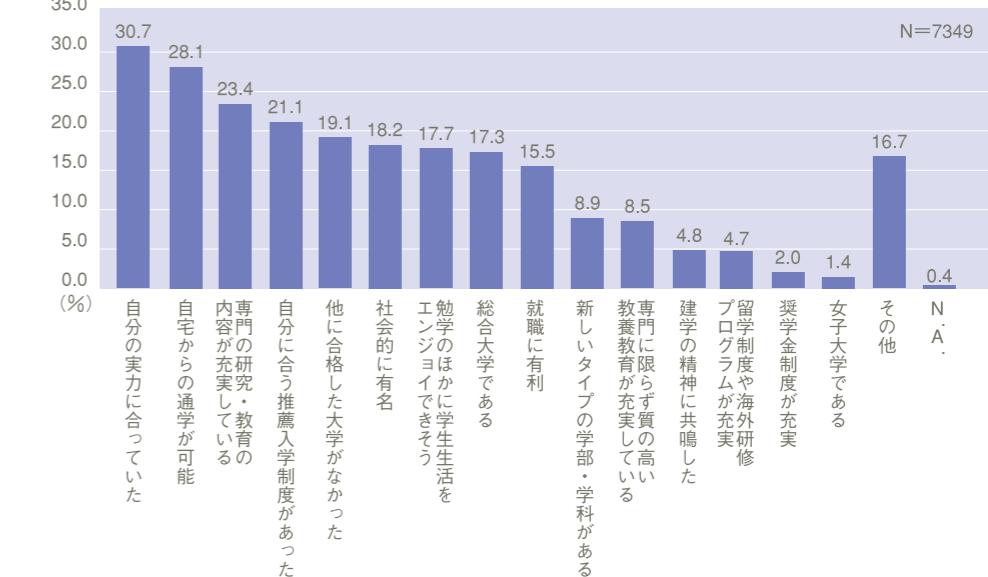


### ● 所属大学の選択理由

「自宅からの通学」や「自分の実力に合う」、「自分に合う推薦入試」などが多く、学生の大学選びについて現実的な側面が見られた。「専門の研究・教育の内容充実」という選択理由は、農・水産・医・歯・芸・体育等で特に多い。その他では「新しいタイプの学部や学科」という理由もあり、目新しさにも反応している。

一方、私立大学としてはこだわりたい「建学の精神」、「奨学金制度」や「留学制度・海外研修」は学生にとって魅力とはなりえず、いずれも大学側が考えるほど学生へのアピール度は高くないとも受けとめられる。

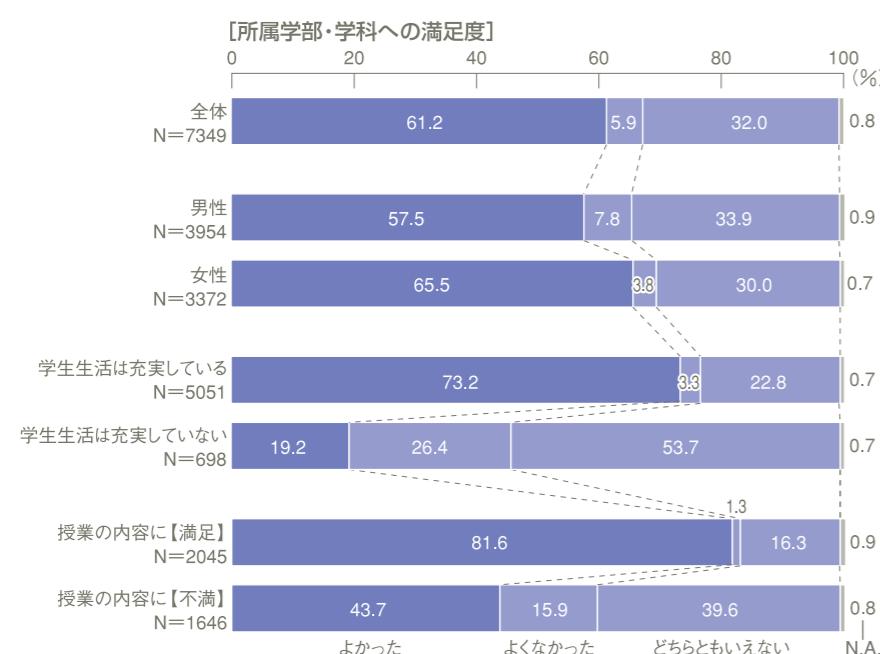
[所属大学の選択理由]



## ● 所属学部・学科の満足度

入学した学部・学科については「よかった」が6割強を示した。反面、「学生生活の充実度」や「授業の満足度」等によって「よくなかった」と答える学生もあり、キャンパスライフの過ごし方が「よい・わるい」の

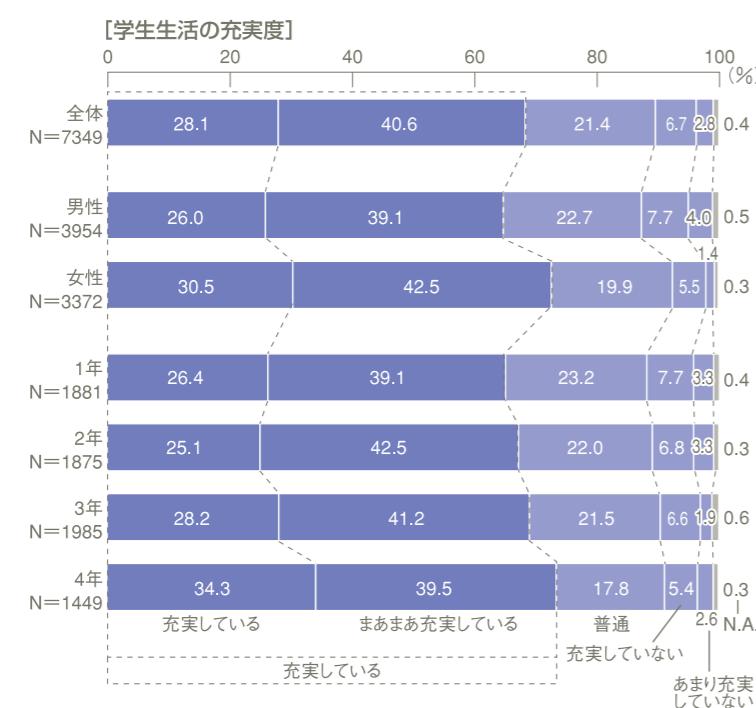
判断の分かれ目になっていると思われる。また、女子学生の方が男子学生よりも満足度がかなり高い。4年生で「よかったと思う」学生が若干増加している点は、大学教育の成果と言えるのかもしれない。



## ● 学生生活の充実度

学生生活は「充実している」が68.7%と約7割を占め、全般に満足傾向が強く表われている。また、男子より女子がより充実感を持って学生生活を過ごしている。学年が上がるにつれて、充実していると感じる学生の割合が少しづつ上昇している。

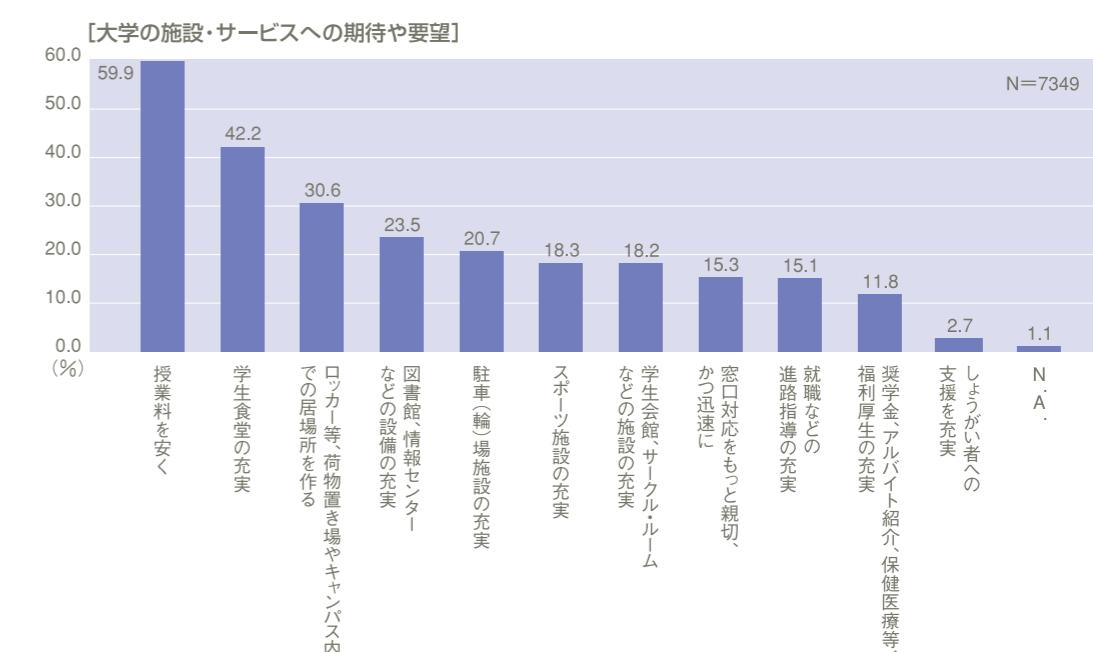
具体的に何に満足しているかに目を向けると、「友人を作り」、「知識や技術を身につけ」、「サークル活動に励む」ということが大学生活を充実させる3要因になっている。この3つのバランスがとれた時、総じて学業の満足度も高くなっている。



## ● 大学の施設・サービスへの要望

現在の景気の動向を反映してか、「授業料を安く」との要望が59.9%で断然トップを示している。次いで「学生食堂の充実」、「キャンパス内の居場所」など具体的な生活環境の充実を願う要望が多く、学生の生活面に対する要望がクローズアップされた。

図書館や情報センターといった教育施設の充実についての要望は学年が上がるにしたがって上昇していることから、利用者の必要性の高まりとともに、施設面で不自由さを感じてきていると言えそうだ。



## 【コメント】

「入学してよかったと思う」比率は前回調査の56.0%から61.2%に、また、「学生生活が充実している」と感じる比率は前回調査の59.4%から68.7%へと上昇している。

本気で学生生活を送っている学生が増えてきたということなのか。そうであってほしいと思うと同時に、大学の責任もいっそう問われるようになったということであろう。

## II. 経済状況

# Cost of Living

### ● 1ヶ月の収入

総収入額が前回調査から約10%減少  
家族からの援助、アルバイト収入などが減少  
「総収入額」**11,300円減少**  
「家族からの援助」**9,000円減少**  
「アルバイト収入」**3,800円減少**

### ● 生活費・学費

生活費を負担している学生は約20%  
経済的に余裕のある学生は25.5%に減少  
学費が高いと感じる学生は80.8%で、  
家計に対する学費の負担感は依然として高い

### ● 奨学金

奨学生受給者の増加  
奨学金への要望トップ3は  
**「返還の必要のない奨学金の充実」(55.2%)**  
**「手続きの簡素化」(36.8%)**  
**「支給枠の拡大」(23.4%)**

### ● アルバイト

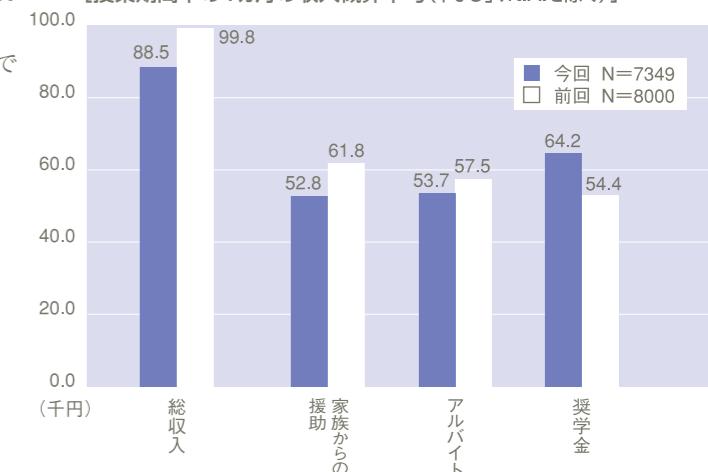
アルバイトをしている学生は全体の7割弱  
1ヶ月平均55時間30分、1週間平均13時間48分  
主な動機は  
**「ほしい物、遊び、旅行、趣味などへの支出」(77.8%)**  
**「生活費、学費などへの支出」(42.0%)**  
**「社会勉強のため」(34.2%)**

### ● 1ヶ月の収入

1ヶ月の収入は88,500円で、前回調査(99,800円)と比べて約10%(11,300円)の減少となった。

減少の主な内訳は、家族からの援助(学費除く)やアルバイト収入であった。

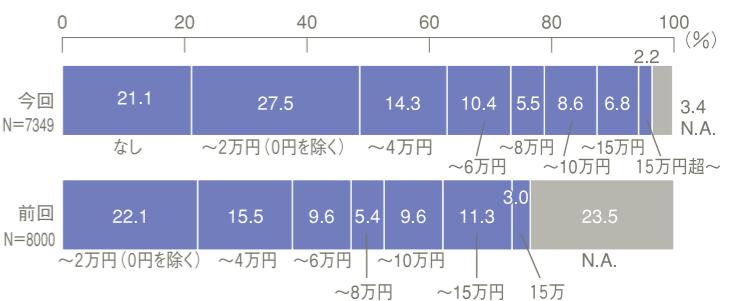
[授業期間中の1ヶ月の収入概算平均(「なし」、N.A.を除く)]



### ● 家族からの援助

家族からの援助の内容としては仕送りや小遣いなどが考えられ、前回調査(61,800円)と比較して1ヶ月あたり9,000円減少している(今回調査52,800円)。特に自宅外学生の援助額では、10万円超から15万円の援助を受けている学生の比率が、前回調査27.1%から今回調査15.1%と大幅に減少し、援助額の低い区分にシフトしている。親の経済状況が学生の生活を直撃している表われと考えられる。

[授業期間中における1ヶ月の家族からの援助]

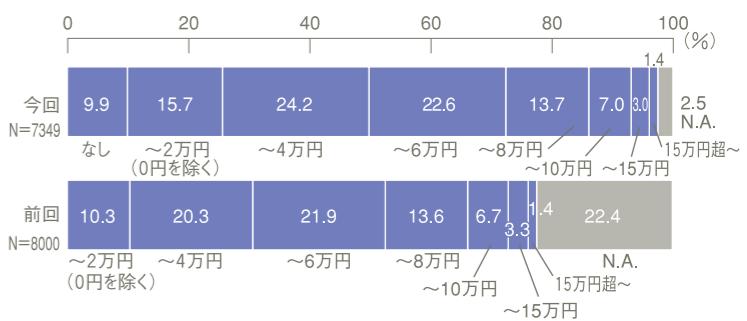


※今回と前回のN.A.の差…設問形式の変更による。

### ● アルバイト収入

アルバイト収入は、前回調査(57,500円)と比較して1ヶ月あたり53,700円と3,800円減少している。1ヶ月の労働時間数が55.5時間と前回調査と比較してもあまり差異がないのに、収入金額が減少しているのは、時間単価の高いアルバイトが少なくなったことが考えられる。

[授業期間中における1ヶ月のアルバイト・定額収入]

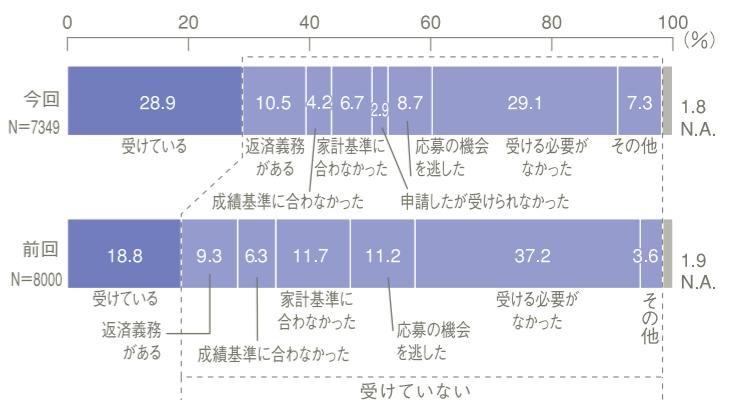


※今回と前回のN.A.の差…設問形式の変更による。

### ● 奨学金

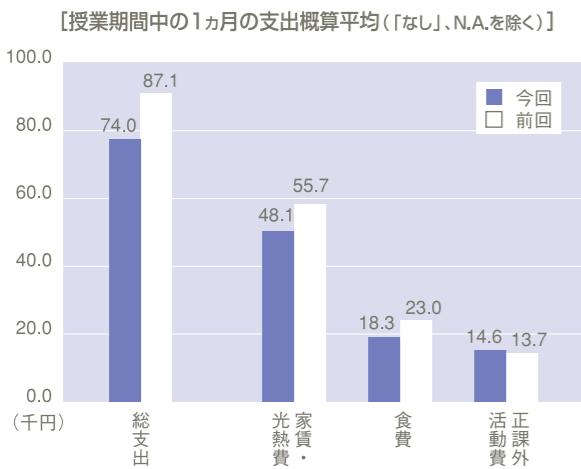
前回調査と比較すると、奨学生を受給している学生が18.8%から28.9%と10.1ポイント増加し、受給額も54,400円から64,200円へと9,800円増加している。家族からの援助やアルバイトでは生活が難しく、収入減を奨学金で補っている現状がうかがわれる。

[奨学金受給の有無]



## ● 1ヶ月の支出

収入の減に伴い、支出も抑えられた結果となった。一部を除きほとんど前回調査と比べて減少しており、支出を切り詰めている現状がうかがえる。



### ● 家賃・光熱費

家賃や光熱費等の減少は、最近の物価の低下を反映している。

### ● 食費

食費については前回調査(23,000円)と比較して約20%減(18,300円)、金額にして4,700円減少しており、ファーストフードの利用など、低価格商品を利用している等の状況が考えられる。

### ● 資格取得講座等の正課外費用

前回調査と比べ、学習資料費や資格取得講座等への支出が増加している。向学志向や、資格取得志向が相変わらず強い傾向が見られる。

### ● 携帯電話・インターネット

今回から調査を開始した携帯電話・インターネット等の通信費は平均で1ヶ月7,000円となっている。

## ● 生活費・学費

経済的に余裕があると感じている学生は、前回調査の27.3%より25.5%と減り、経済状態が前回調査に比べ悪化している現状がうかがえる。生活費は前回調査の77.1%とほぼ同数の76.0%が親の負担となっているが、逆の見方をすれば20%強の学生が経済的に自立した生活を送っていることになる。

### ● 学費

学費が家計にとって負担になっていると考える学生は、前回調査の87.9%から88.7%と若干増し、約9割の学生が依然として学費に対して負担を感じていることがわかる。

また、学費が高いと感じている学生は、前回調査の79.8%から80.8%となり、性別・所属学部・学年にかかわらず、学費の引き下げに対する要望は強い。

## ● 奨学金

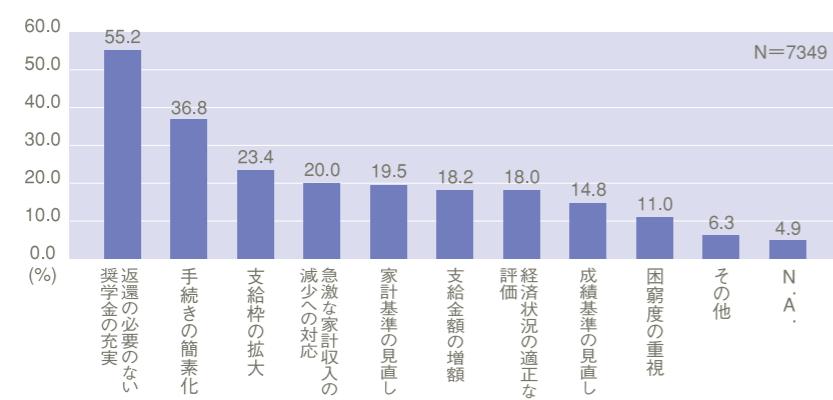
奨学金受給者が前回調査の18.8%から28.9%へと急激に増加しており、奨学金の必要性が高まっている現状がうかがえる。また、受給してはいないが受給を希望する学生は33.0%おり、家族からの援助やアルバイト収入だけでは生活が苦しい現状を示している。

### ● 奨学金制度

奨学金制度に対する要望の1位が「返還の必要のない奨学金の充実」で55.2%と群をぬいでいる。3位の「支給枠の拡大」をあわせて考えると、経済状況の悪化が深刻であることが読みとれる。また2位に「手続きの簡素化」を選んでおり、申請資料の多さ・複雑さや申請時の煩雑さの解消を望んでいる。今後、返還義務のない奨学金の充実や支給額の増加、申請方法の簡素化等、制度自体を根本的に見直す必要があると考えられる。

また、リストラ・倒産等にともなう家計の急激な悪化に対する緊急措置的な給付も望まれており、昨今の社会情勢を反映している。

### [奨学金制度への要望]



## ● アルバイト

### ● アルバイトをしている学生

アルバイトをしている学生は前回調査の77.7%から67.2%へと大幅に減っている。この原因は、主に雇用機会の減少等が考えられる。また、前回調査と同様に「入学してよくなかった」、「学生生活が充実していない」等の不満型学生が、アルバイトを多くしている傾向があると言えよう。

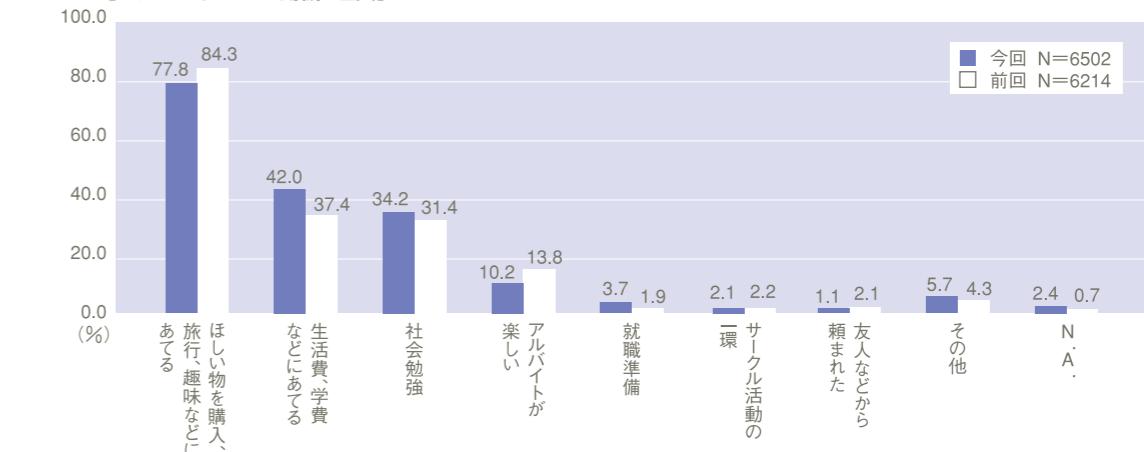
### ● アルバイトの労働時間

1ヶ月の労働時間は55時間30分と前回調査に比べ大きな変化はない。1週間では13時間48分、1日平均1時間51分であった。

### ● アルバイトをする動機

1位は「ほしい物、遊び、旅行、趣味などの支出」であり、2位は「生活費、学費などの支出」、3位は「社会勉強のため」と前回調査と同様であった。しかし、前回調査に比べ、「ほしい物、遊び、旅行、趣味などの支出」が84.3%から77.8%と減少し、「生活費、学費などの支出」が37.4%から42.0%へ増加していることから見ても、家計に余裕がなくなってきた現状がうかがえる。

### [アルバイトをする動機・理由]



## 【コメント】

全体に日本のデフレ不況、雇用状況の悪化を反映した結果となった。収入が減少し、またそれにともない支出も減少している。親の経済状況の悪化やアルバイト機会の減少にともなう収入の減少、生活費の節約、デフレによる家賃・食費等の低価格化による支出の減少もうかがい知ることができる。このような経済状況の中で、学費に対する負担感は依然高い。今後の施策として、学費の減額・減免、奨学金制度の充実、学資金の貸付制度なども検討していく必要があるのでないかと考える。

## III. ライフ

# Ordinary Life

## ● 平均的な1日の生活時間

キャンパス滞在時間は6.33時間

図書館・コンピュータ室などの利用は約80%の学生が1時間以下

学外の講座・各種学校(ダブルスクール)への参加者は9.2%

## 通学時間

「自宅からの通学者」1時間37分

「自宅外からの通学者」40分

## 睡眠時間・就寝時間

平均的な睡眠時間は6.55時間

高学年になると夜型が進行

## ● 興味・関心事

トップ3は、  
**「資格の取得」(22.2%)**  
**「クラブ・サークル活動」(22.0%)**  
**「大学の勉強」(18.1%)**

前回1位の「友人との交際」は4位に後退(22.6%→15.2%)

## ● 大学生生活で大切なこと

トップ3は、  
**「よい友人・先輩を得ること」(40.0%)**  
 ただし、前回から大幅にダウン(47.1%→40.0%)  
**「経験を豊富にし、見聞を広めること」(35.8%)**  
**「専門的知識・技術を習得すること」(29.1%)**

## ● 平均的な1日の生活時間

平均的な1日の生活時間はおおよそ右グラフのとおりである。キャンパス滞在時間は6.33時間。課外活動に参加している学生(6.95時間)は参加していない学生(5.48時間)より約1.5時間長くキャンパスに滞在している。キャンパス滞在時間と通学時間を合わせると7.55時間となり、1日の約3分の1を「大学」で過ごしていることになる。

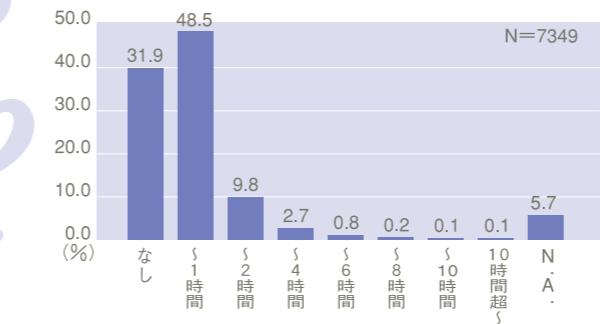
※ キャンパス滞在時間:授業、図書館・コンピュータ室の利用、課外活動など  
 キャンパス外滞在時間:学外講座、アルバイト、自由時間など(睡眠時間を除く)



## ● 図書館・コンピュータ室などの利用時間

今回調査で約80%の学生が図書館やコンピュータ室を1日あたり1時間以下しか利用していないという実態が浮かび上がった。まったく利用しない人も31.9%いる。4年生以上になると利用時間が若干上がることや、高学年になるとほど「パソコンやインターネットを使いこなす力がついた」と感じていることから、1年生から3年生の間は授業が

[平均的な1日の図書館・コンピュータ室利用時間]



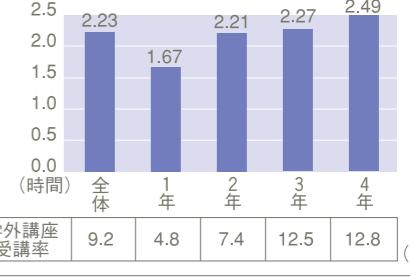
忙しく、4年生になって就職活動や卒業研究などのために図書館やコンピュータ室を利用しているのではないかと思われる。なお、低学年ほど大学の情報化に関する取り組みについて評価が高くなる傾向があり、各大学の整備が進んでいる結果が反映されているのではないかと推察できる。

[平均的な1日の図書館・コンピュータ室利用時間]  
 (概算平均/N.A.除く)

## ● 学外の講座・各種学校(ダブルスクール)

学外の講座・各種学校(ダブルスクール)へ通っている学生は9.2%で、平均的な受講時間は2時間14分。3年生、4年生になると人数も時間数も増加する傾向にあり、正課授業時間数が減少して空いた時間を利用し卒業後の進路を考えて受講し始める人が多いのではないかと思われる。

[学外講座受講時間(概算平均/N.A.除く)]



## ● 通学時間

自宅からの通学者の平均時間は1時間37分で、ほとんどの学生(76.7%)が2時間以内となっている。2時間~4時間かけて通学している学生も17.1%いる。一方、下宿生の平均通学時間は40分で、79.8%の人が1時間以内となっている。

[通学時間]



## ● 睡眠時間・就寝時間

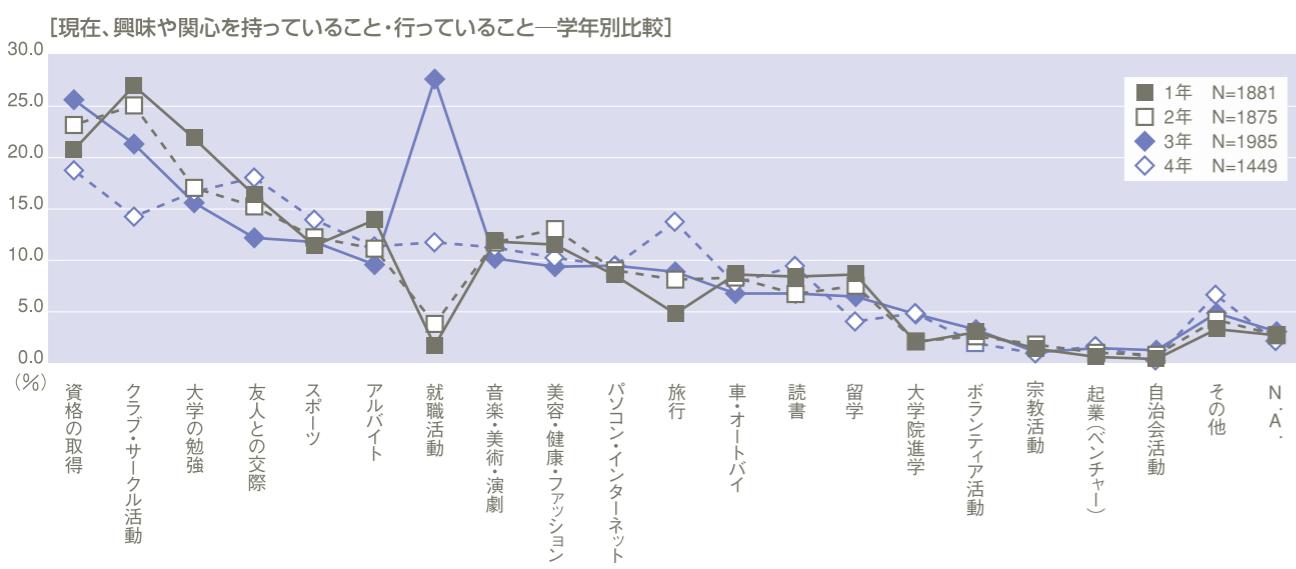
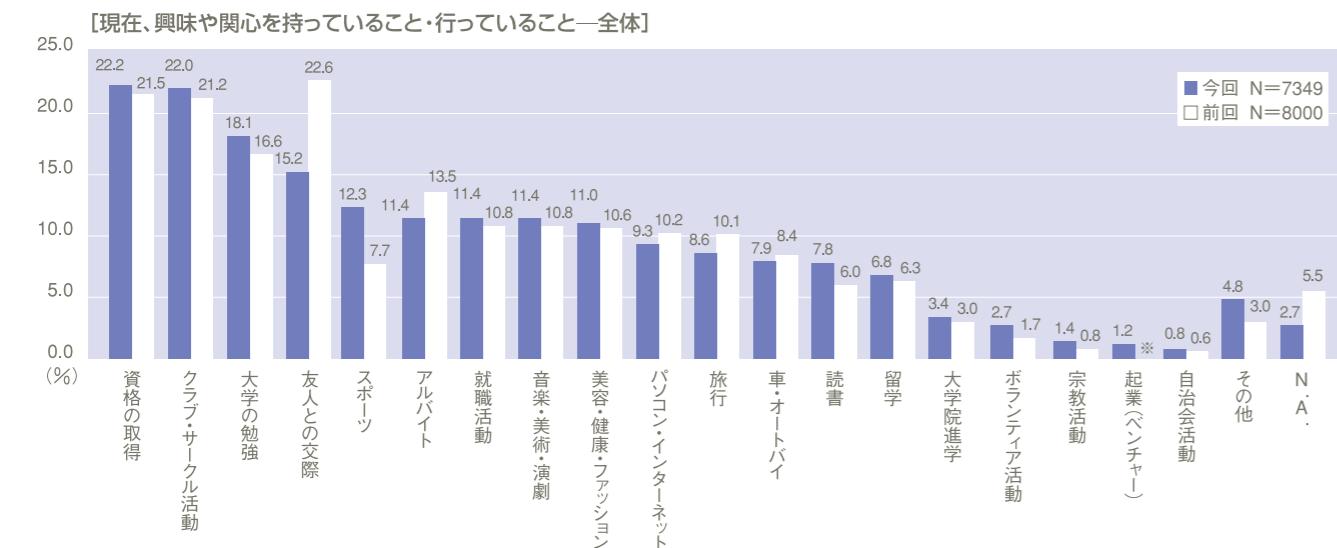
平均的な睡眠時間は6.55時間。ほとんどの学生が午前0時~2時ごろに就寝する。自宅通学者は若干就寝時間が早い。4年生では午前3時以降に就寝する学生が11.5%おり、高学年になると夜型の生活になることがうかがえる。



## ●興味・関心事

「資格の取得」「クラブ・サークル活動」「大学の勉強」がトップ3。1位の「資格の取得」と2位の「クラブ・サークル活動」は、前回調査と変わらず大きな変化はないが、「大学の勉強」が前回4位から3位にランクアップした(16.6%→18.1%)。この傾向は1年生で特に高く、22.0%の学生が「大学の勉強」に興味・関心を持っている。この結果からも学生が学業を重視する傾向を少しづつ強めていることがわかる。「学業重視」は今回調査の大きな特徴で、他の調査項目でも明らかになった現象と言える。

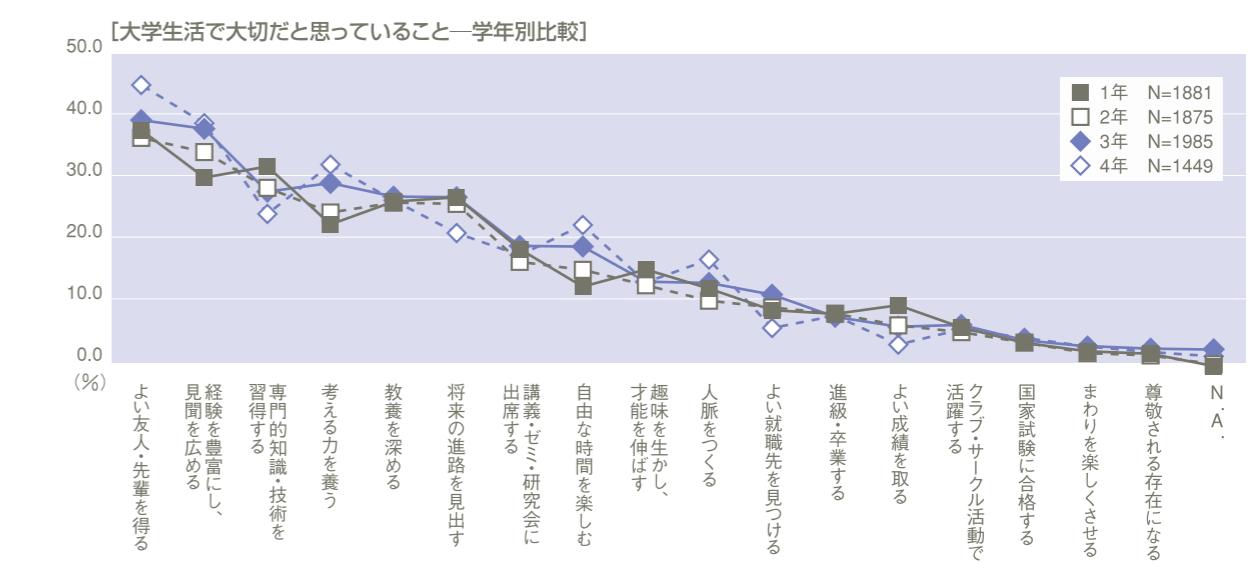
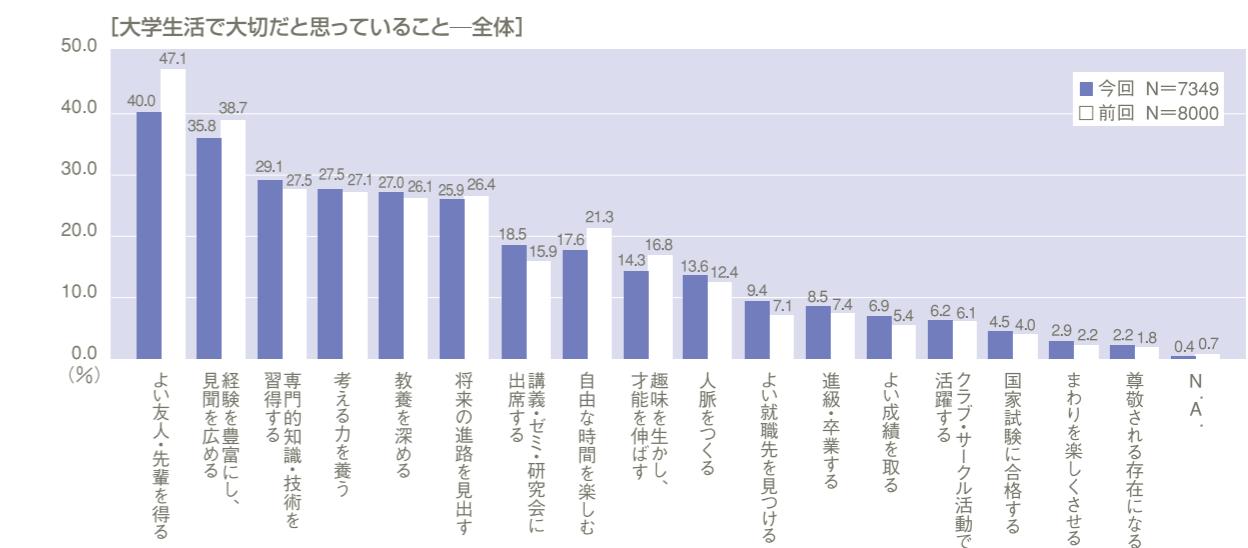
一方、その傾向とは逆に「友人との交際」が激減したことでも注目すべき変化である。また、アルバイトや旅行も減少していることも注目すべき点である。昨今の社会状況の影響を受けて資格取得や大学の勉強に力を入れざるを得ず、そのしわ寄せが「友人との交際」の減少という結果となって表われていると推測することができる。



## ●大学生活で大切なこと

「よい友人・先輩を得る」が40.0%で1位、2位は「経験を豊富にし、見聞を広める」、3位は「専門知識・技術を習得する」となっている。今回調査で1位の「よい友人・先輩を得る」は前回調査の47.1%だったことを考えると大幅なダウンを示しており、他には「経験を豊富にし、見聞を広める」や「自由な時間を楽しむ」も減少傾向を示している。一方、「専門的知識・技術を習得する」や「講義・ゼミ・研究会にきちんと出席する」が増加しており、左のコラムの「興味・関心事」の調査結果を裏づけるように学業重視の傾向が顕著になっている。

ここでも低学年ほど学業重視傾向が強く、逆に4年生で「よい友人・先輩を得る」(45.3%)や「経験を豊富にし、見聞を広める」(39.1%)が高率という結果が出ている。



## 【コメント】

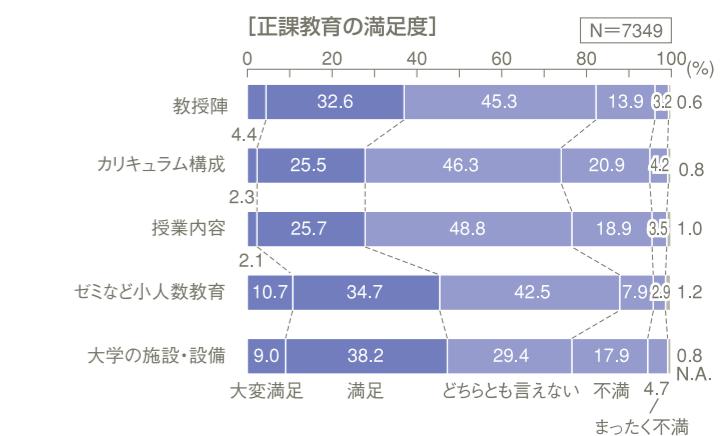
学生生活に対する興味や意識が「友人関係や社会勉強」から「学業・資格取得」へと、大きくシフトしてきている。景気低迷による就職

状況の悪化や経済状況の悪化が学生の意識にも影響を与え、危機感を強めているのではないかと考えられる。



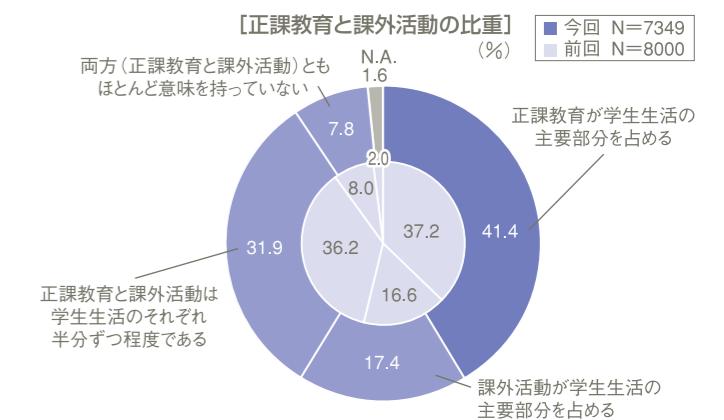
### ● 正課教育の満足度

正課教育に対する学生の満足度は、総じて上がっていない。特にカリキュラム構成と授業の内容に関して、前回調査から改善の跡が見られないのは、深刻な問題と言わざるをえない。教授陣に対する満足度が37.0%であるのに対して、授業内容に満足している学生が27.8%にすぎない現状は座視しがたく、授業改善は大学にとって緊急かつ極めて重要な課題である。



### ● 正課教育と課外活動の比重～脱レジャーランド

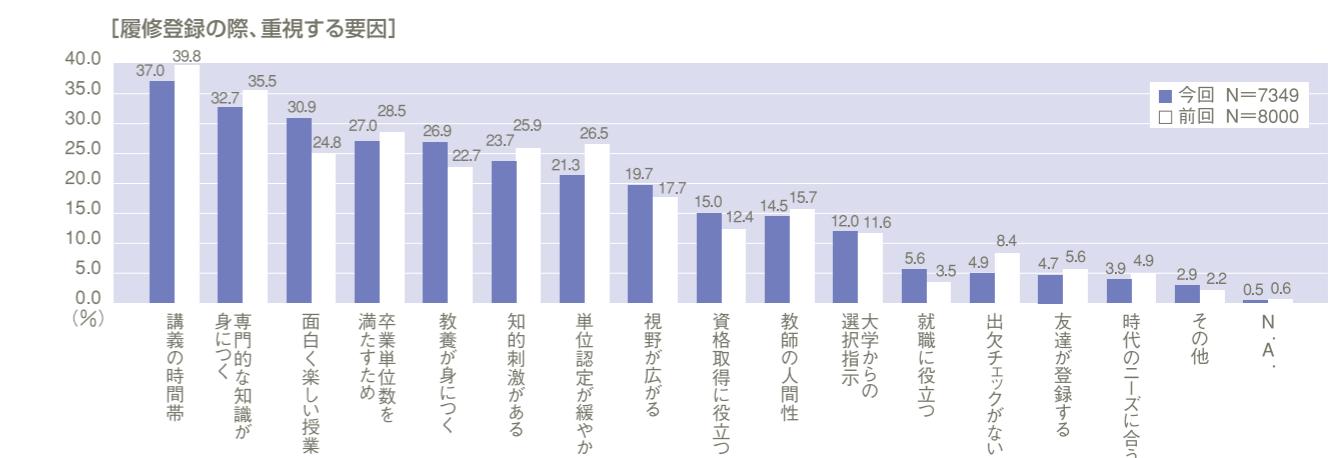
正課教育を学生生活の中心に据えている学生が4割を超え、正課教育と課外活動が半分ずつ、という中途半端型が減少したことは、前回調査との大きな違いである。大学は遊んで過ごすところ、というレジャーランド意識は薄れつつあり、まじめに勉強しようとする学生が増加していることがうかがわれる。



### ● 科目履修の動機～積極的履修の増加

科目履修の動機は、授業内容に対する期待から選択する積極的履修と、時間的・制度的な制約から選択する消極的履修に大別される。今回調査でも履修動機の1位は「講義の時間帯」という消極的理由であったが、「卒業単位数を満たすため」「単位認定が緩やか」等の消極的履修は減少した。

今回調査で顕著な点は、積極的履修が大幅に増加したことである。なかでも「面白く楽しい授業」「教養が身につく」をあげる学生が大幅に増えた。同時に「専門的な知識が身につく」も2位に上がり、学生の科目選択の動機が教養主義と専門主義に分極化していることがわかる。正課授業重視の姿勢に傾きつつある学生たちは、「とりやすい授業」を安直に履修するのではなく、面白くためになるか、専門的知識を修得できるか、いずれにせよ「としたい授業」を、積極的に履修しようとする意欲を高めている。

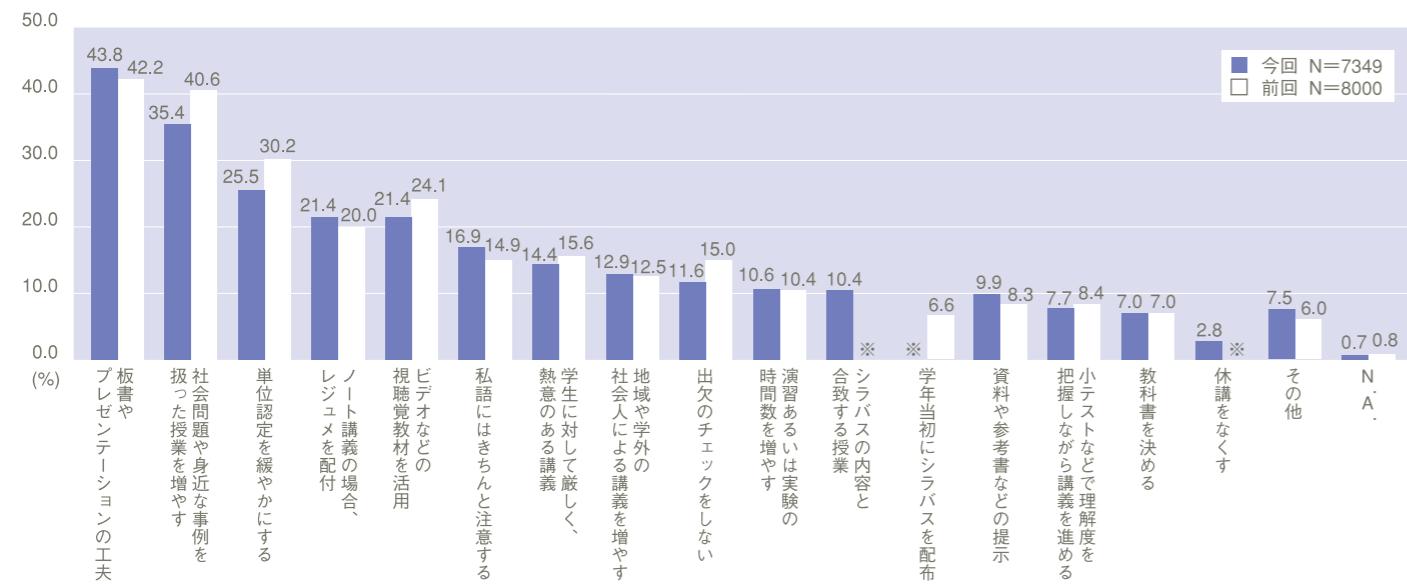


## ● 講義への要望

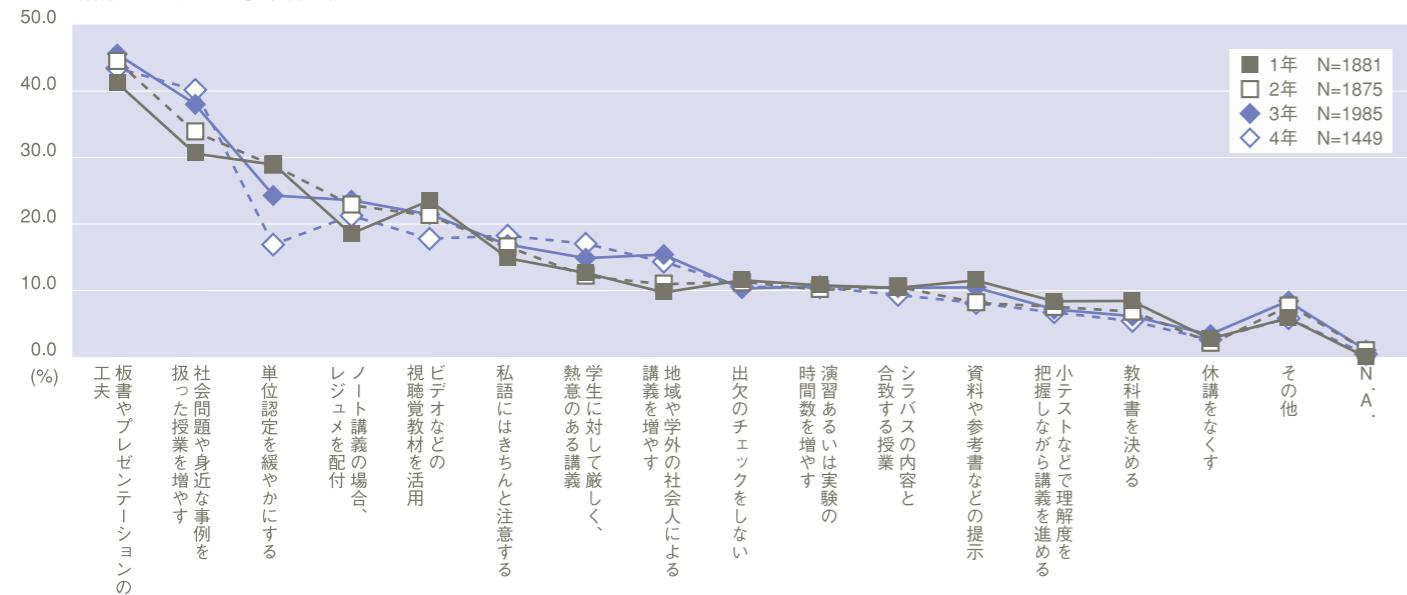
講義に関する要望では、「板書やプレゼンテーションの工夫」「レジュメの配付」「視聴覚教材の活用」など、教員の授業改善を望む意見が上位にあがっている。大学の教育内容や方法に対する学生の期待や要望事項のなかで「多様な科目選択ができるカリキュラム」を求

める比率は39.4%と前回調査より5.6ポイント上がっている。学部の性格によっても対応は異なるだろうが、学生の多様な関心に応えうる弾力的なカリキュラム編成が求められていることは明らかである。

[講義への要望 — 全体]



[講義への要望 — 学年別比較]



## ● 教育内容・方法への期待～専門教育と教養教育の二極化

今回調査で大きく様変わりしたのは、大学の教育内容への要望である。「授業数の縮小」「他大学との単位互換」「学生による授業評価」等の項目が大きく減少しているのは、各大学がこれらの事項の改善に取り組んだことの表われであろう。目を引くのは、「教養科目の充実」が前回調査より7.2ポイント上昇し、要望事項の3位にあがってきたことである。他方、2位には「一貫した専門教育が受けられるカリキュラム」があがっている。大学の教育に対する学生の

要望は、徹底した専門教育と幅広い教養教育に分極化しているよう

に見受けられる。

専門主義と教養主義、という学生の期待の分極化に応えるひとつ

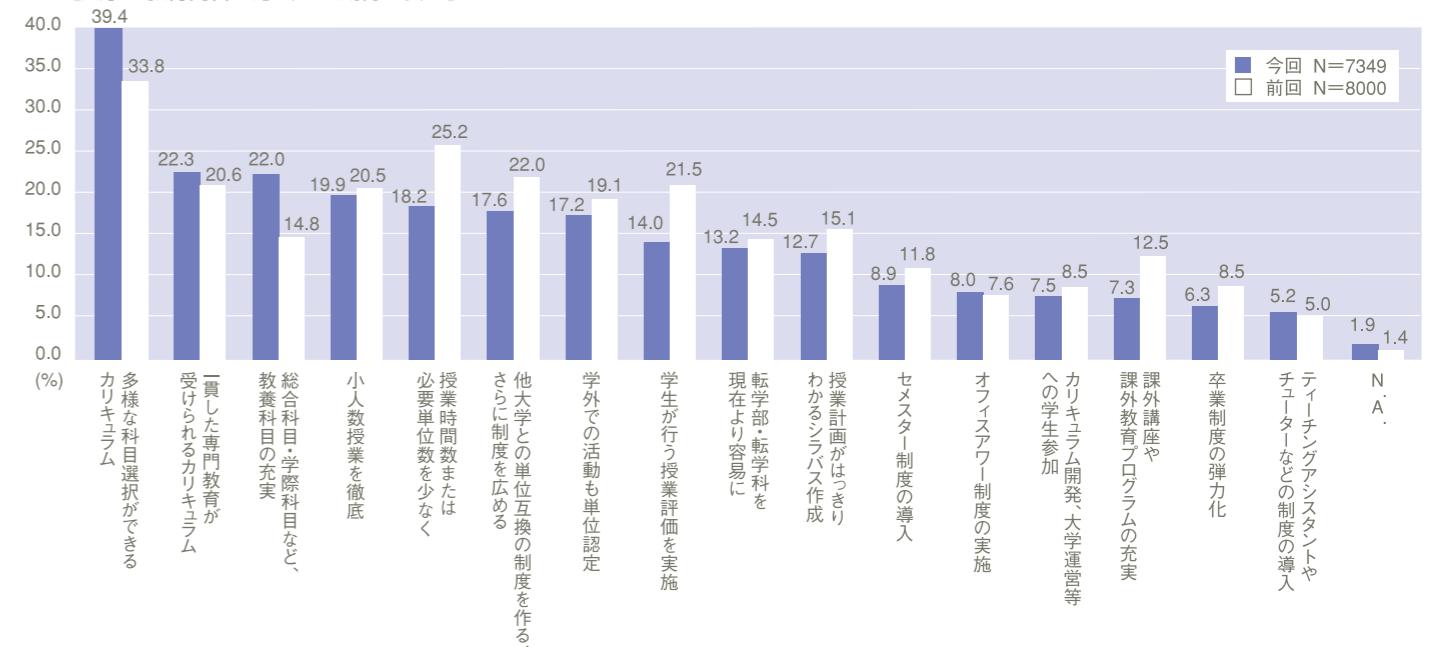
の方法が、柔軟なカリキュラム編成であることは言うまでもない。学生の

要望事項の1位に「多様な科目選択ができるカリキュラム」があが

っているのは当然であり、学生は大学の正課システムの問題点をよく理

解していると言えるだろう。

[大学の教育内容や方法への期待や要望]



[コメント]

学生たちは、前回調査に比べて正課の授業を積極的に、真剣に勉強しようとする意欲を高めている。大学の脱レジャーランド化傾向が明白に表れてきていると言えよう。ところが授業や教育内容は、学生の期待に十分応えきれていない。専門教育の徹底を望み、他方で幅広

い教養教育を求めるという学生の多様な意識をくみとり、柔軟なカリキュラム編成を構築することは、教員の授業改善と並んで、今日の正

課教育に求められている課題である。



## ● 正課外講座

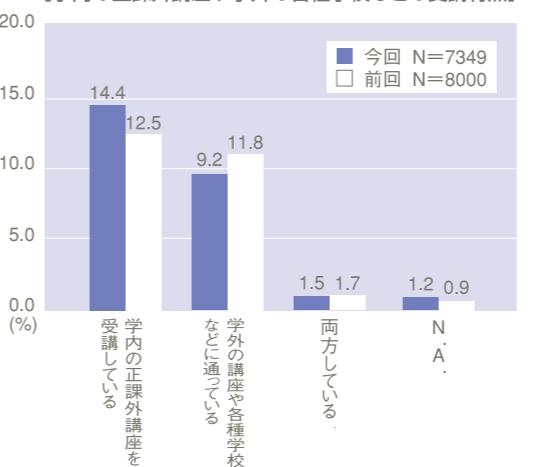
回答した学生の25.1%は、学内の課外講座や学外の各種学校、講座に参加している。ほぼ4人に1人が自分に付加価値をつけるために、正課の授業の他に教育を受けていることになる。ただし、この比率自体は、前回調査とほとんど変化はない、とりわけ学外の講座・学校利用者は、9.2%で、いわゆるダブル・スクール現象は、学生の多数派に浸透するまでには至っていない。

正課外講座の受講先は、前回調査に比べて学内の正課外授業の受講上昇(12.5%→14.4%)、学外の各種学校の減少(11.8%→9.2%)の傾向が見られる。学生の資格志向に、各大学が学内講座を充実させてきたことがうかがえるが、前回調査に比べて、正課外講座全体の参加率(26.0%→25.1%)は横ばいながら、支出面で学外講座の費用がアップ(13,700円→14,600円)している。学外講座の費用は

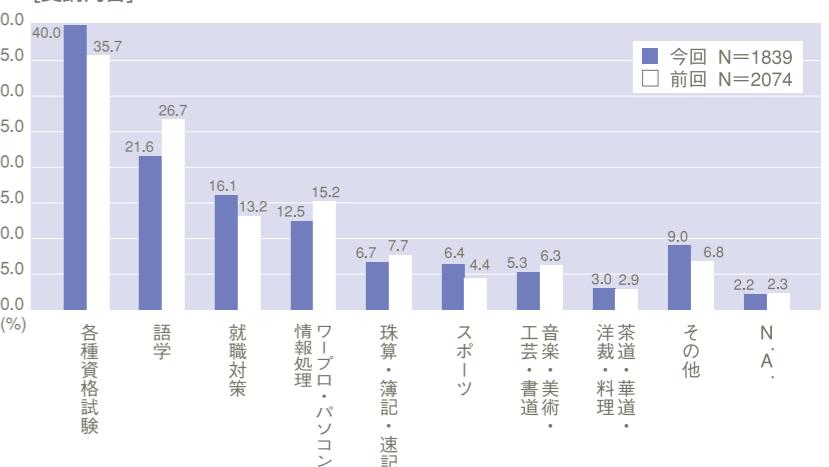
デフレ傾向の中、唯一の支出増を示しており、注目に値する。また、講座内容や質的な充実に応じて、費用負担が増加しているとも考えられるだろう。

受講内容を見ると、1位は「各種資格試験のための講座」、2位が「語学」、3位が「就職対策」である。「語学」(26.7%→21.6%)と「パソコン」(15.2%→12.5%)に関しては、前回調査から減少がみられ、中・高等教育を含めて学校教育における情報・国際教育の普及の結果とも言えよう。一方、各種資格試験(35.7%→40.0%)、就職対策(13.2%→16.1%)が増加し、その傾向は女性に顕著(10.5%→14.5%)であり、厳しい雇用情勢を考慮して、卒業後の進路に直接役立つ技能を習得しようとしている学生たちの姿が浮かび上がってくる。

[学内の正課外講座や学外の各種学校などの受講有無]



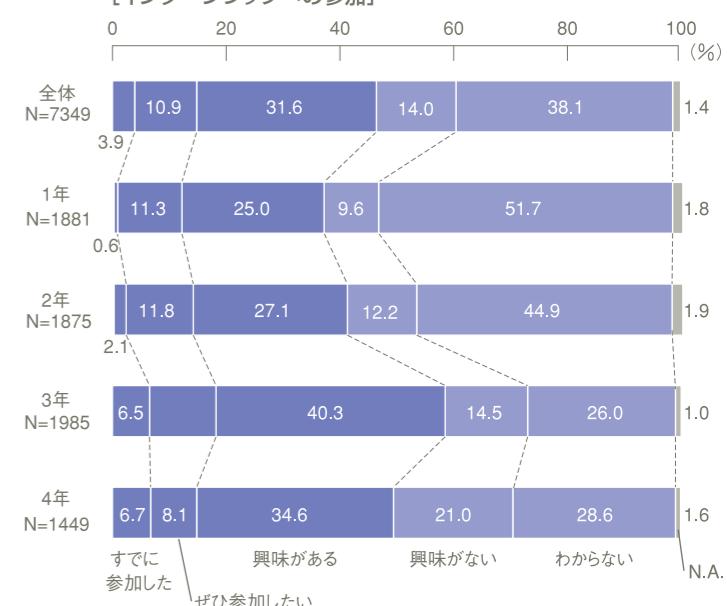
[受講内容]



## ● インターンシップ

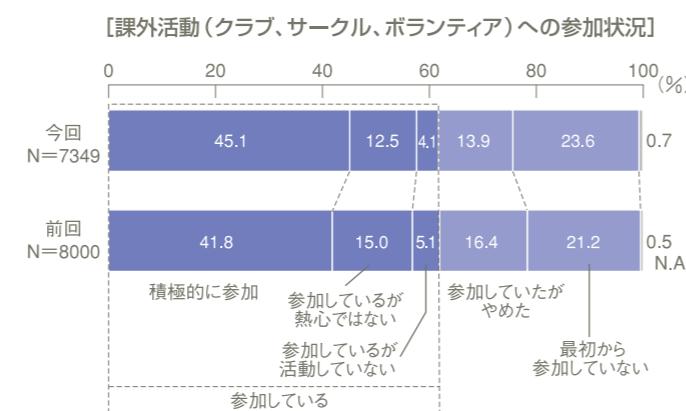
今回調査で、インターンシップへの要望が急速に大きくなっていることが明らかになった。特徴的なのは、学年が上がるにつれ興味が増す傾向を示しながら、4年生になると急に興味が減少する点である。企業の採用活動に急速にインターンシップが取り入れられはじめおり、いまやインターンシップは就職活動の一環になりつつある状況、あるいは就職活動へ向けての一過程となりつつある状況がうかがえる。

[インターンシップへの参加]



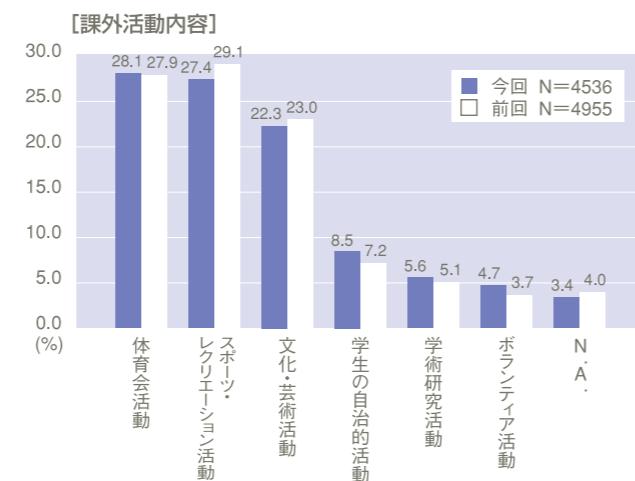
## ●課外活動

学生のサークル離れが言われて久しいが、課外活動に「参加している」と答えた学生は61.7%にのぼり、そのうち73.5%の学生が「授業と両立している」と答えている。この数字は前回調査とほぼ同じで、実際にはサークル離れはおきていない。むしろ課外活動に「積極的に参加している」学生が前回調査より3.3ポイント(41.8%→45.1%)増加すると同時に「最初から参加していない」(21.2%→23.6%)も増加しており、課外活動に参加する学生としない学生の二極分化の傾向が見られる。



## ●活動内容

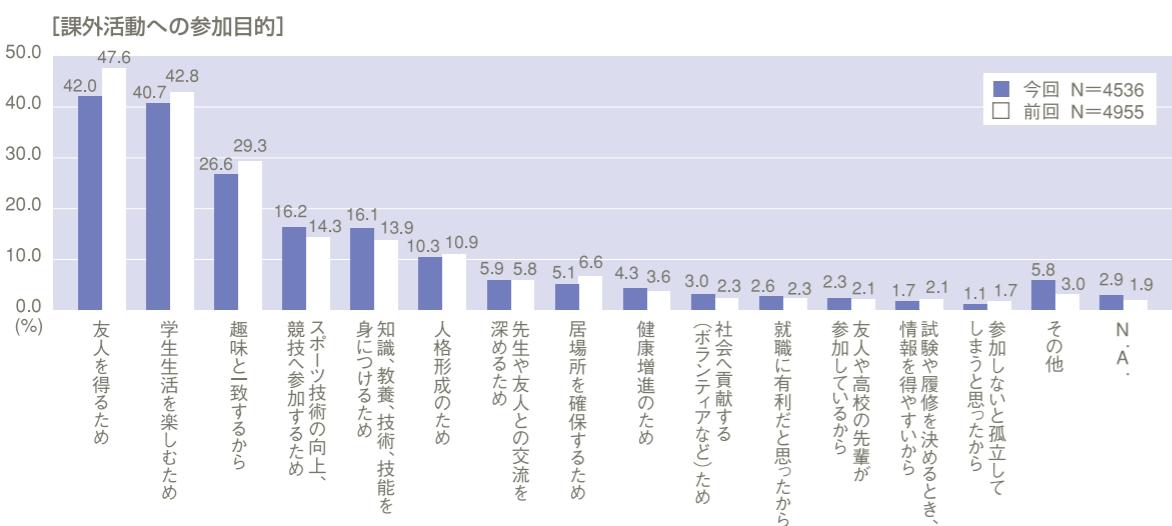
前回調査と比べても課外活動のトップ3は変化ない。ただし「スポーツ・レクリエーション」が減少(29.1%→27.4%)し、「ボランティア」、「自治的活動」へ若干シフトしている傾向が見られる。活動団体別でみると、複数の大学で構成する団体、学内未公認団体が減少し、学内公認、他大学、大学外の団体が微増しており、より安定し、組織化された団体にシフトする傾向が見られる。参加しているサークルの種類を見ると、前回調査で2位だった「体育会活動」が、1位だった「スポーツ・レクリエーション活動」を僅差で押さえてトップとなった。この2つをあわせると55.5%となり、サークル活動に参加している学生の過半数は、競技スポーツやレクリエーションなど、身体を動かすことを通じて、友人との交流を深めているように見える。



## ●参加目的

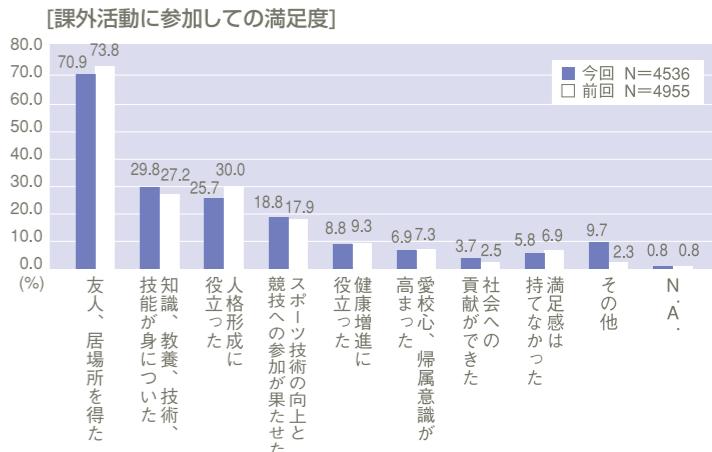
「友人を得るために」「学生生活を楽しむため」が断然トップで、前回調査と変わっていない。友達をつくり、学生生活をエンジョイするために、つまりは学生生活を豊かにするために、自覚的にサークル活動に参加していることがわかる。ただ、「友人を得るために」(47.6%→42.0%)、

「学生生活を楽しむため」(42.8%→40.7%)、「趣味と一致するから」(29.3%→26.6%)が減少、「知識、教養、技術、技能を身につけるため」が増加(13.9%→16.1%)している点は、正課外講座と同様、現実的な学生の姿がうかがえる。



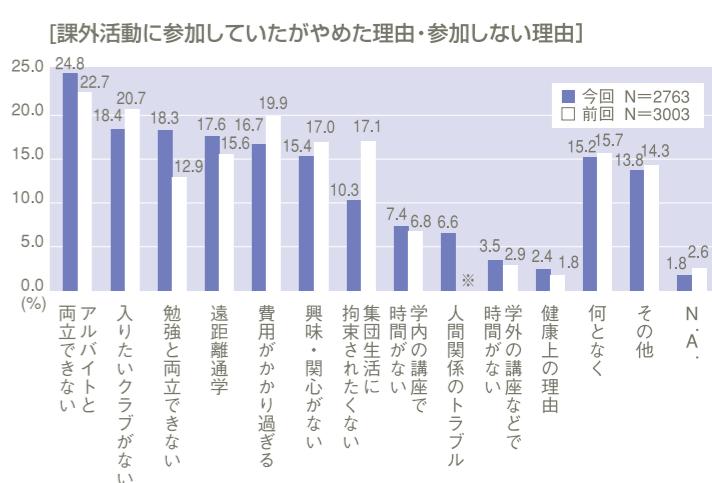
## ●満足度

「友人、居場所を得た」、「知識、教養、技術、技能が身についた」、「人格形成に役立った」などトップ3は前回調査と変わらず、70.9%の学生は「友人、居場所を得た」と答えており、学生生活の精神的充足の手段として、課外活動が機能していると言えよう。ただし「人格形成に役立った」が減少した点、そして学部別で見た場合、「満足感は持てなかった」が薬系で13.5%、家政系で12.5%ある点に留意したい。



## ●参加していたがやめた理由・参加しない理由

前回調査に続き「アルバイトと両立できない」がトップ(22.7%→24.8%)。2位の「入りたいクラブがない」には並んで、「勉強と両立できない」が5.4ポイント(12.9%→18.3%)上昇して3位に入った。勉強重視の傾向はここにも表われている。「集団生活に拘束されたくない」は、前回調査に比べて大幅に減少(17.1%→10.3%)した。



## ●ボランティア活動

大学入学後、ボランティア活動に「参加したことがある」と答えた学生は17.3%で、経験者は20%に満たない。前回調査に比べて大幅に比率が減少したのは、設問を「大学入学後」と限定した結果だと考えられる。

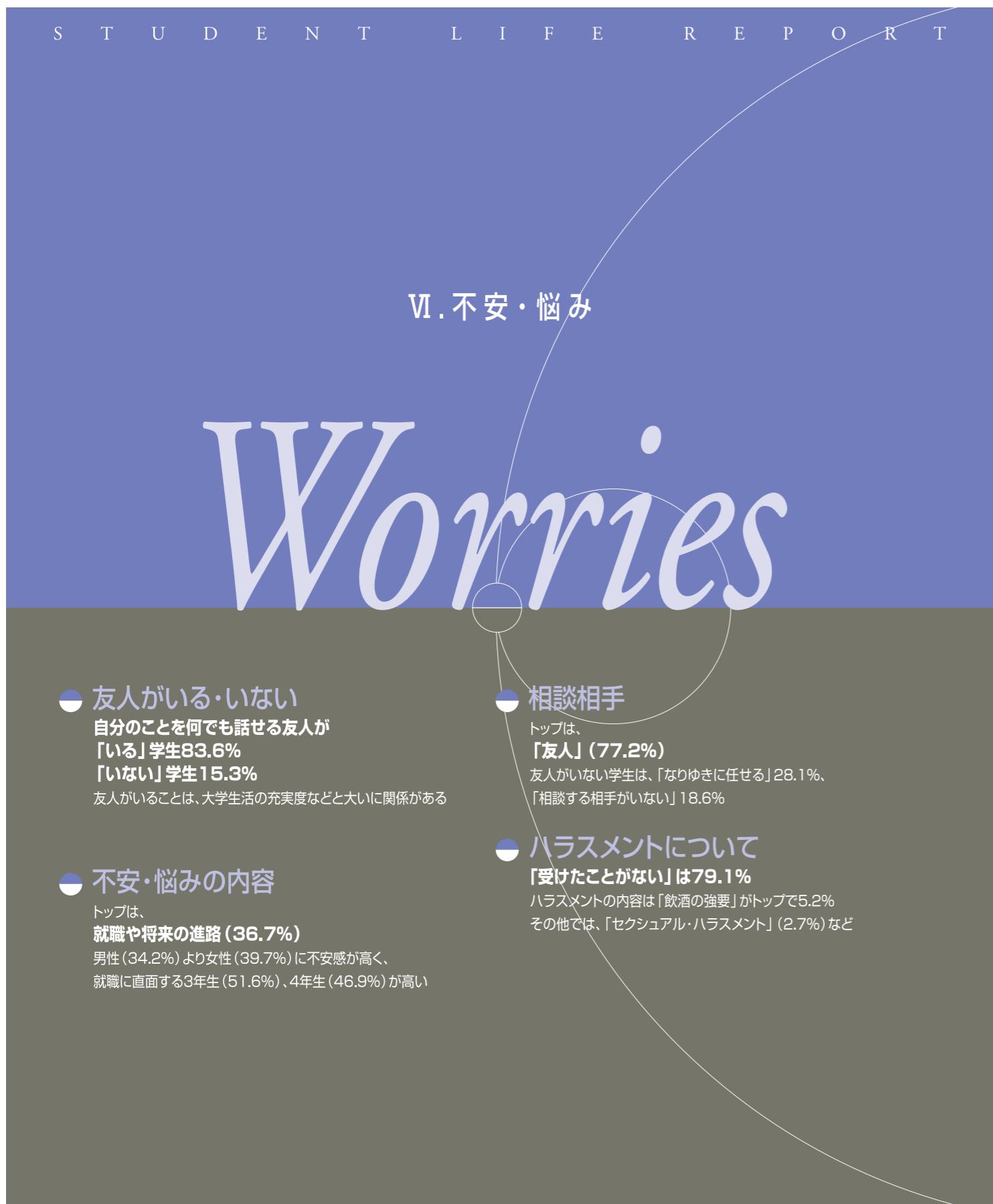
参加経験者にその動機を尋ねてみると、「社会勉強のため」(37.3%)がトップだったが、前回調査に比べて減少している。一方、「大学生活を充実させるため」が前回調査に比べて9.1%から19.1%と倍増したことは特筆すべき点である。それとは反対に「友人に誘われて」と

いう消極派は減少(20.0%→14.2%)し、「単位が認定されるから」、「正課の授業に組み込まれていたから」などの回答はごく少数にとどまった。学生自身で課外の学生生活を設計する意欲が高まった反面、学生時代のボランティア経験の意義が十分認識されているとは、まだまだ言いがたい状況が浮かび上がった。

## 【コメント】

前回調査に比べて、正課教育同様、正課外活動にもまじめに取り組んでいる姿が感じられる。ただし、本来、真剣に取り組めば取り組むほど勉学との両立は困難になると思われるが、70%以上の学生が「両立している」と答えている。正課外活動の目的や満足度における「人格

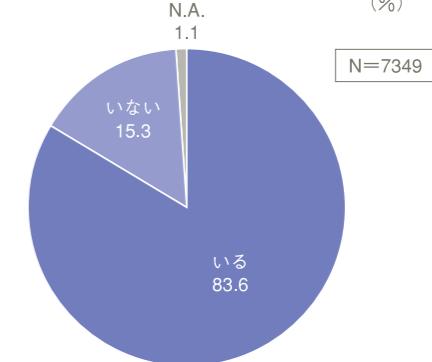
形成」要因が弱い点から考えると、活動内容や人間関係は希薄化しながらも、正課外講座から得られるものと同様、個人の知識やスキルアップに興味がシフトしているように感じられる。



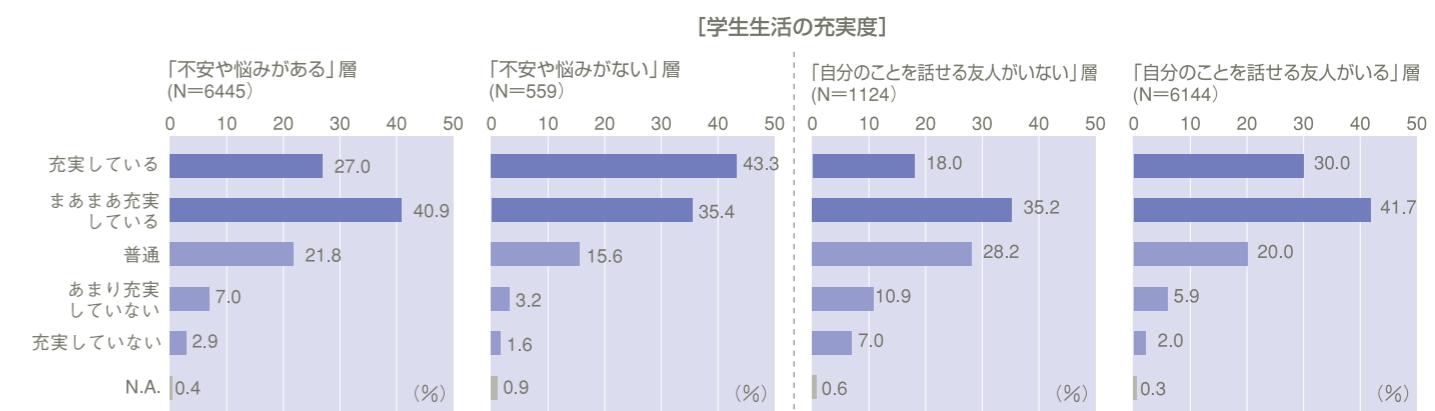
## ● 友人がいる・いない

「自分のことを何でも話せる友人」について83.6%が「いる」と答えていた。前回調査では、「自分のことは何でも話せる異性の友人」がいるのは62.7%であり、「自分のことは何でも話せる同性の友人」がいるのは90.2%であった。前回調査では友人の種類とそれぞれの人数を把握することを試みたが、今回調査では「現在、自分のことを何でも話せる友人いるか、いないか」だけを聞いた。「自分のことを何でも話せる友人」をどの程度深く考えているか読み取ることは難しいが、「何でも話せる」とは、親しい友人とみなすこともできるだろう。質問形式を変更したため経年変化を測ることはできないが、交友関係が深まらず友人が減ってきている傾向にあると考えられる。

[自分のことを何でも話せる友人の有無]  
(%)



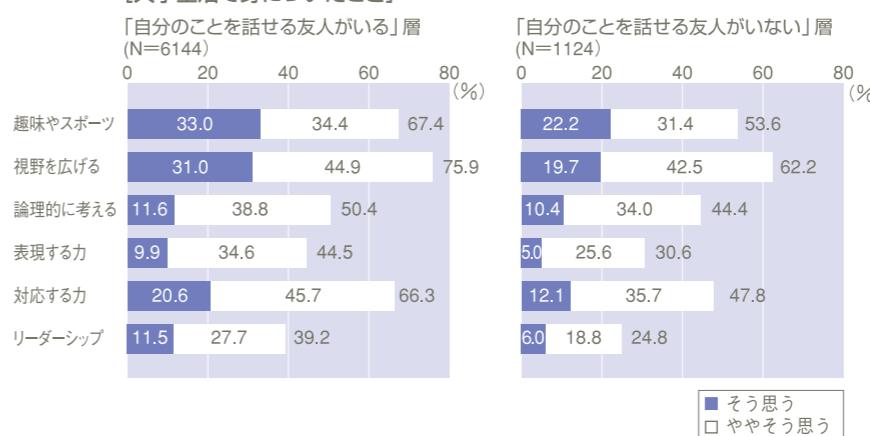
一方で、友人がいない学生では53.2%（「充実している」+「まあまあ充実している」）にとどまっている。このことから、親しい友人がいるかどうかが充実した学生生活を送ること大いに関係のあることがわかる。



「大学生活で身についたこと」と友人の有無の比較を試みた。悩みの有無で比較した場合は、どの項目でもそれほど大きな差ではなく、最大でも「趣味やスポーツ等によって生活を楽しむ力がついた」の4.4ポイントである。パソコンや相手と対応する力では、むしろ「悩みのある学生」の方が「悩みのない学生」より力がついたと答えている。しかし

友人の有無で比較すると、下記グラフのとおり、すべての項目において「友人がいる学生」の方が力がついたと答えている。特に、趣味やスポーツ、表現力、相手との対応力、リーダーシップなどは顕著であり、最大で18.5ポイントの差がついている。大学生活で身につく力は、さまざまな対人関係の中で獲得していくものであると言えるだろう。

【大学生活で身についたこと】

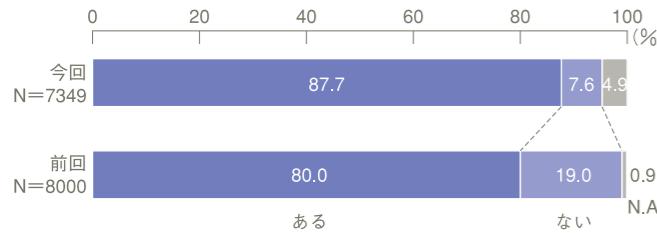


友人の有無についてかなり男女差があり、「友人がいる」と答えているのは女性が88.2%であるのに対して男性は79.8%である。女性の方が社交的であると言える一方、友人との対人関係に悩むのも女性の方であり、男性の6.2%に対して、女性は10.2%と高くなっている。

## ● 不安・悩みの内容

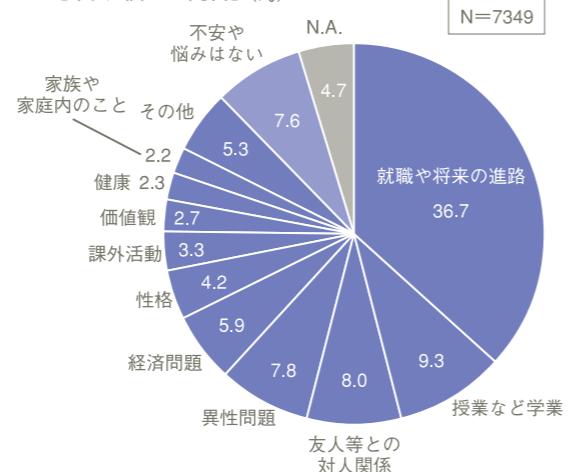
不安や悩みのある学生は、87.7%である。質問方法が異なるので完全な比較はできないが、前回調査の80.0%を大きく上回った。トップは「就職や将来の進路」36.7%で、2位「学業」9.3%、3位「対人関係」

### 【不安・悩みの有無】



8.0%を大きく引き離している。そして悩みや不安があると答えた学生のグループについて悩みの内訳をみると、1位「就職や将来の進路」はさらに際立っている。

### 【不安・悩みの内容】 (%)



### ● 就職や将来の進路への不安・悩み

学年別に見ると1年生では19.1%であるが、就職に直面する3年生では51.6%と急激に増加する。また就職がほぼ決定したと思われる4年生でも46.9%と高いのは、まだ納得のいく就職活動が終了していないか、就職活動が終了しても「将来の進路」として卒業後の不安を感じている学生が多いことを示している。今日の社会状況や就職状況の厳しさから、不安や悩みのある学生が多いのは当然とも言えよう。

### 【就職や将来の進路への不安や悩み】 (%)



### ● その他の不安・悩み

1年生のトップ3は、「就職や将来の進路」19.1%、「授業など学業」13.2%、「友人等との対人関係」11.5%であり、学業や友人関係の不安や悩みが比較的高い。また学年末試験を経験していない1年生が学業に不安があることは理解できるが、対人関係が11.5%と高いことに注目したい。入学すると同時に友人を早く見つけようとあせっていたり、

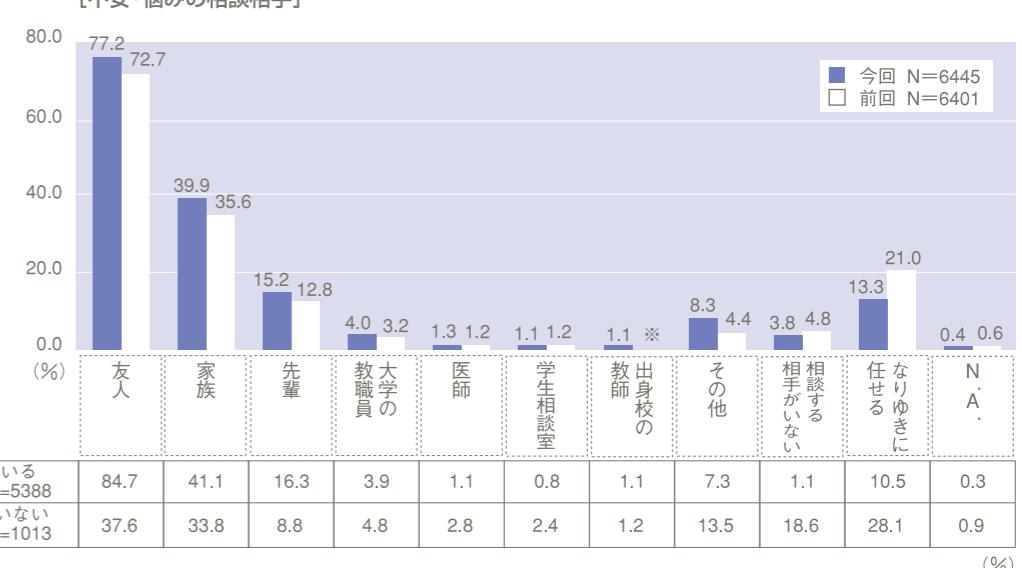
友達に合わせて明るく振舞おうとして疲れてしまう学生を見かけることがあるが、学生生活には親しい友人が必要と考えており、特に1年生は親しい友人が見つけられなかったり、うまくいかなかったりすると不安や悩みとなるのだろう。

## ● 相談相手

今回調査で選択肢に「出身校の教師」を加えたが1.1%であり、学生相談室と同様の数字であった。選択肢を増やしたので正確な経年変化は捉えられないが、「なりゆきに任せる」が減少し、友人や家族、先輩を相談相手として選ぶ学生が増えている。悩みの相談相手で突出して77.2%と高い数字となっているのは、「友人」である。

では、「友人がいない」と答えたグループは相談相手に誰を選んでいるのかみてみると、1位は「友人」であるが37.6%と低く、友人がいる学生のグループとは47.1ポイントも差がある。また「家族」への相談も7.3ポイント低くなっている。「相談する相手がない」が18.6%であり「なりゆきに任せる」が28.1%であることから、彼らは悩みを話す相手に恵まれず、なりゆきに任せざるを得ないという閉塞状況に陥っていることがわかる。

### 【不安・悩みの相談相手】 (%)



## ● ハラスメントについて

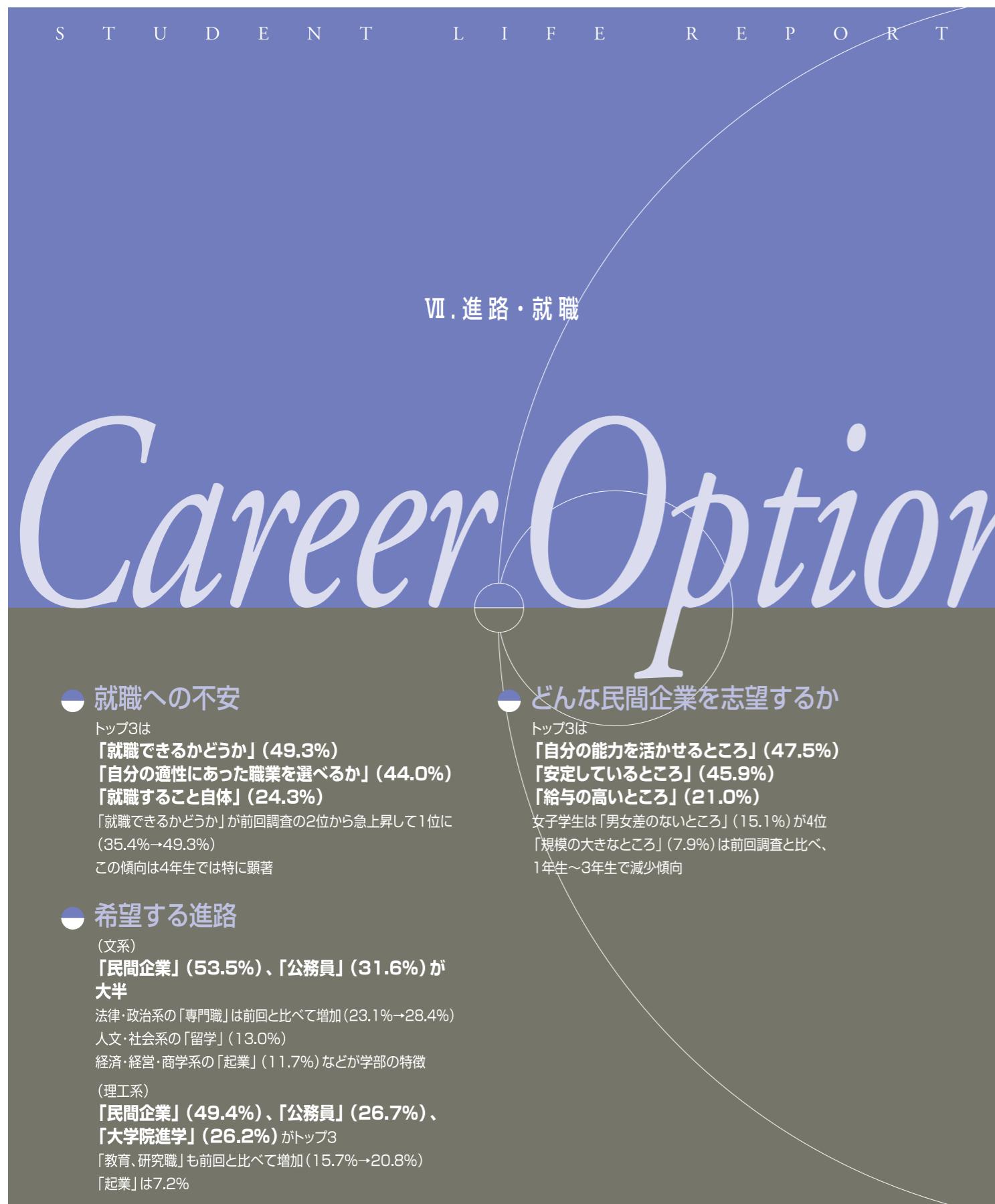
ハラスメントを「受けたことがない」と答えている学生は、79.1%である。男性78.0%、女性80.6%となっており、性差はほとんどなく、学年比較でも1年生82.2%、4年生79.0%であり、大きな変化があるとは言えない。ハラスメントの種類では、1位が「飲酒の強要」で5.2%となっている。特に男性が7.0%と女性の3.2%と比較して高い。また課外活動に参加していない学生は1.5%であるのに対し、参加している学生が6.5%となっている。イッキ飲みなど生命に関わる危険な行為にもなりかねない

飲酒の強要について、学生たちに注意を喚起したいところである。「セクシュアル・ハラスメント」については、男性の1.2%に対して女性が4.4%と高いことが特徴である。また、今回初めて大学生活での「いじめ」についての設問を設けたが、「ストーカー」1.9%、「中傷メール」1.8%に続いて1.7%であった。

## 【コメント】

不安や悩みを持つ学生たちに対応するために、各大学で学生相談室の充実への取り組みが進められていることと思う。今回調査によると「学生相談室に行く」と答えていたのは全体で1.1%であり、友人がいない学生でも2.4%にとどまっている。特に、友人がいない学生の

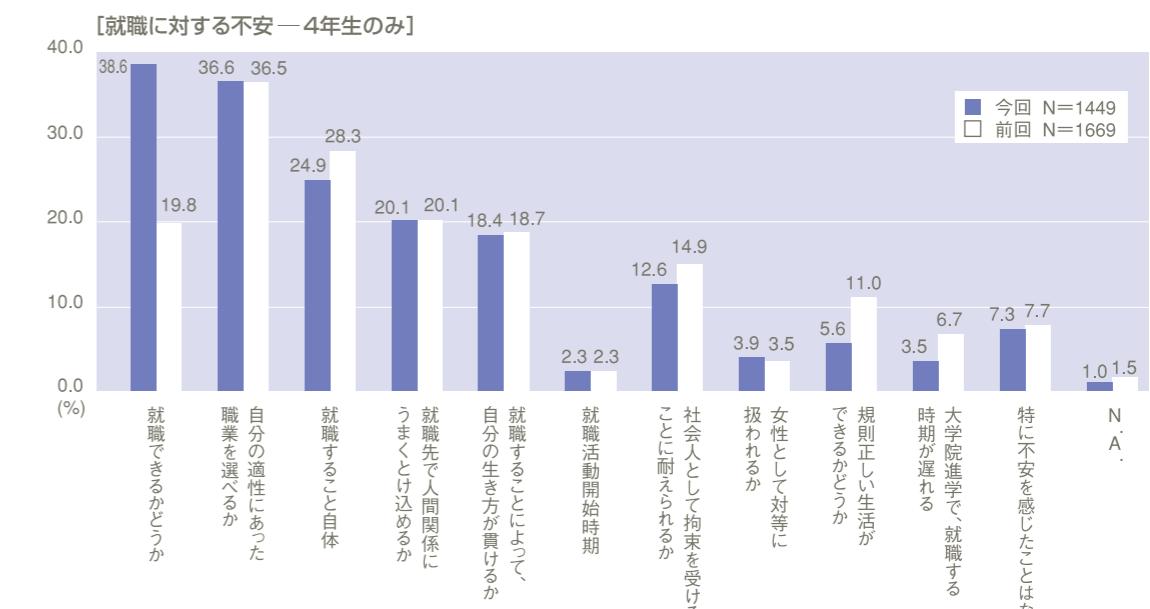
中には、学生相談室に行くことを選択しない、閉塞状況に陥っている人がいることがわかった。この学生たちへの対応の場を検討する必要があるのではないかだろうか。



### ● 就職への不安

トップ3の「就職できるかどうか(49.3%)」、「適性にあった職業を選べるかどうか(44.0%)」、「就職すること自体(24.3%)」は4年前と比べて変わりがない。しかし、「就職できるかどうか」という根本的な不安が35.4%から49.3%に急増し、「適性にあった職業を選べるか」をおさえてトップに躍り出た。原因は、不景気で企業の採用意欲が低調であるからにほかならない。この傾向は4年生において特に顕著であり、19.8%から38.6%と大幅に上昇している。調査時期の10月の時点において、まだ就職先の決まらない4年生が増えているためと考えられる。もちろん学生もそれに対処するため、正課を重視し、正課外活動

(ダブルスクールなど)に力を入れている。その結果、積極的履修者が増加し、教授陣への満足度もアップしている。一方、4年生になると、「人間関係にとけ込めるか(20.1%)」、「自分の生き方が貴けるか(18.4%)」、「束縛に絶えられるか(12.6%)」といった、就職後の具体的な不安も増えてくる。また、「入学してよくなかった」「学生生活が充実していない」等の不満型学生や、「課外活動に参加していない」消極的学生は概して「就職すること自体」に不安を感じる傾向が強いことがうかがえる。これらの不安を解消するためには、学年別に学生の立場に立ったきめ細かな進路指導が望まれる。

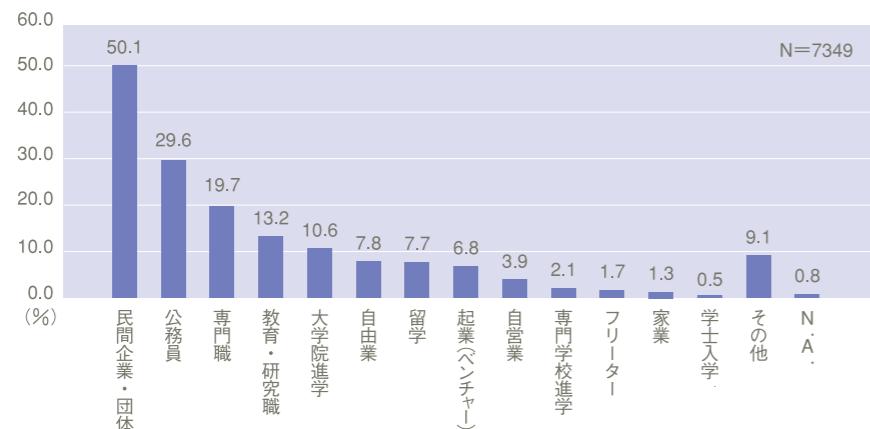


## ● 希望する進路

「民間企業・団体」、「公務員」、「専門職」のトップ3は前回調査と変わらない。一方、特に女性にとって「留学」が、男性にとっては「起業(ベンチャー)」が一つの進路となりつつある。法律・政治系学生の「専門職」(23.1%→28.4%)、理工系学生の「教育・研究職」(15.7%→20.8%)の増加も見逃せない。その反面、「自由業(芸術家・著作業など)」は12.0%から7.8%に減少した。この傾向は芸術系学部においても同様

に見られ、「自由業」希望者の割合が前回調査に比べ62.8%から51.3%に減少している。また、「フリーター」を「希望する」人は1.7%とごく少数であり、好んでフリーターを就職先の一つと見なしているわけではないことが明らかになった。いずれも、手堅く就職先を確保したいという心情の表われと見られる。

[希望する進路－全体]

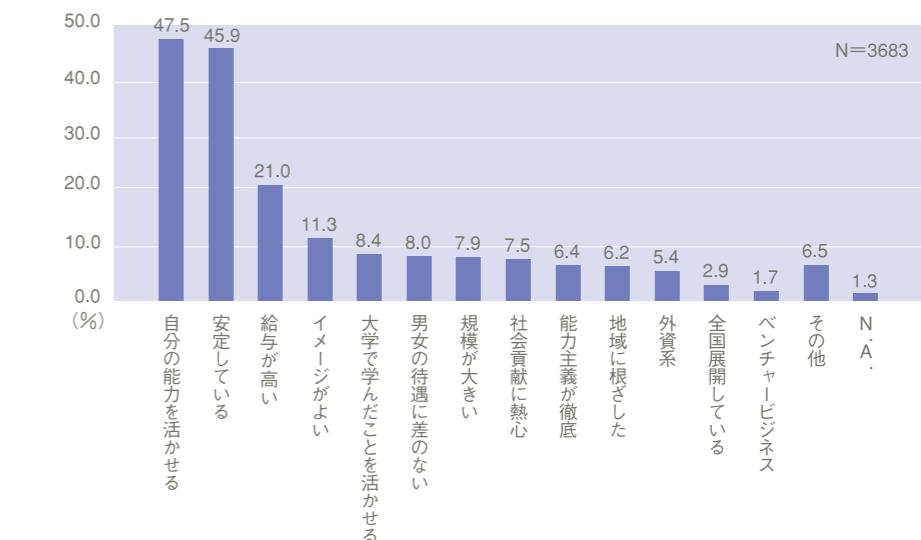


## ● どんな民間企業を志望するか

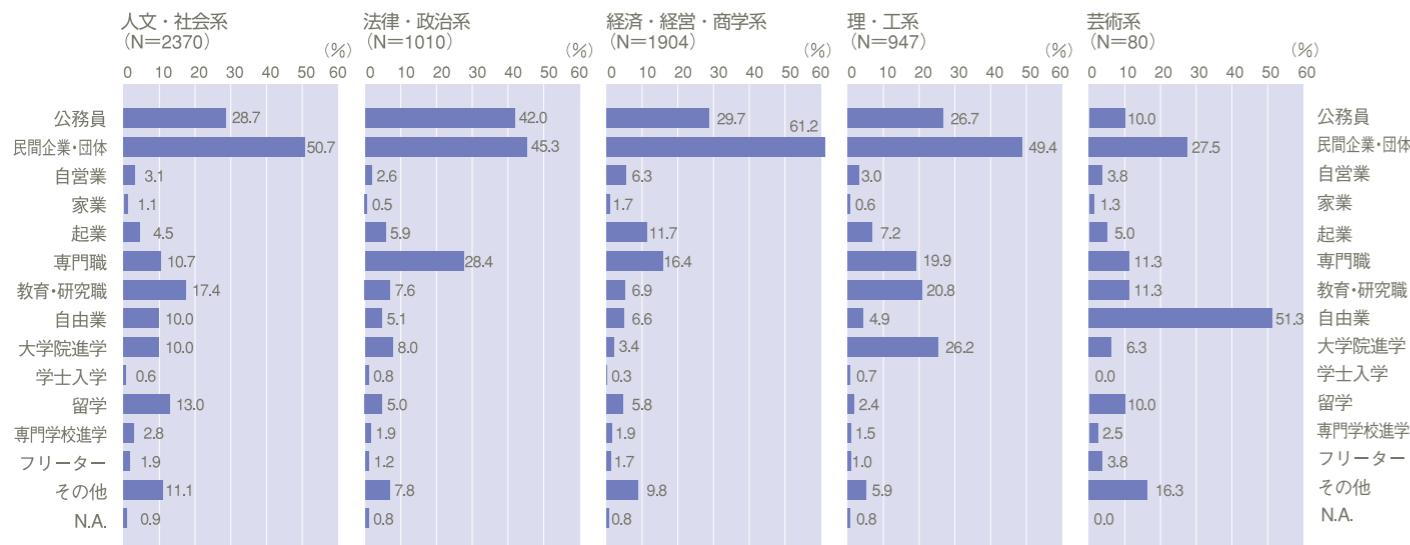
トップ3の「自分の能力を活かせるところ(47.5%)」、「安定しているところ(45.9%)」および「給料が高いところ(21.0%)」はほとんど前回調査と変わらない。男女とも安定志向が強い。女子学生は「男女の待遇に差がないところ(15.1%)」がこれに次いでおり、これは前回調査の21.2%から減っているものの、まだ民間企業における男女差を感じていることがうかがえる。

差のないところ(15.1%)」がこれに次いでおり、これは前回調査の21.2%から減っているものの、まだ民間企業における男女差を感じていることがうかがえる。

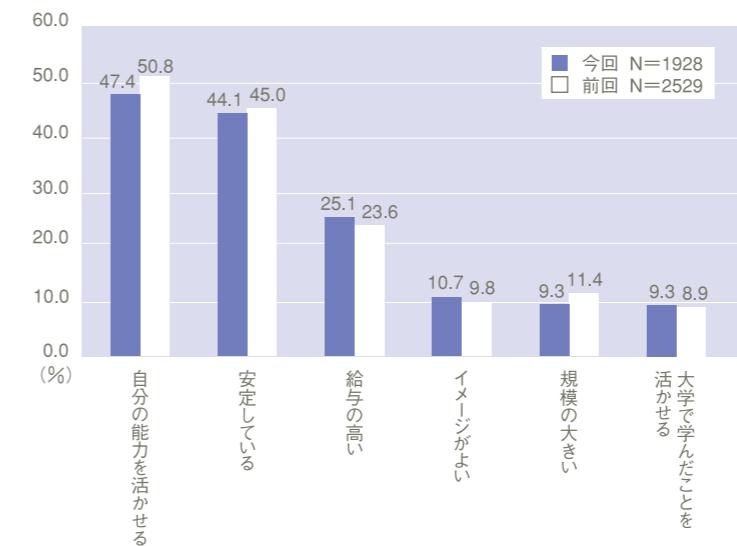
[希望する民間企業・団体－全体]



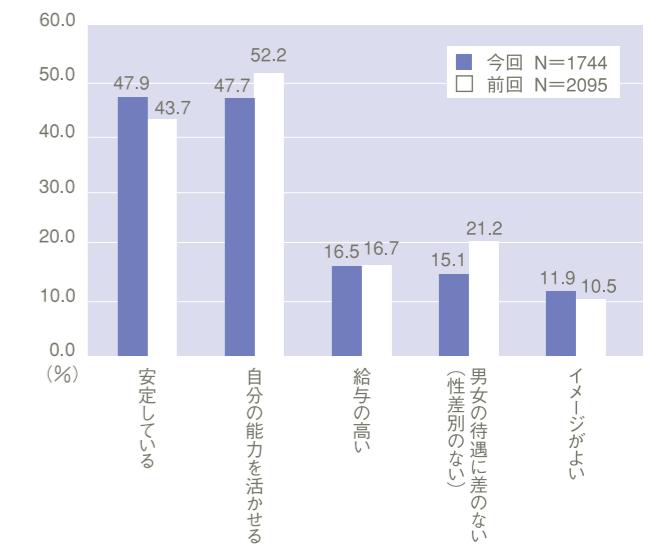
[希望する進路－専門分野別]



[希望する民間企業トップ5－男性]



[希望する民間企業トップ5－女性]



## 【コメント】

昨今の低迷した経済状況の中にあって、「就職できるかどうか」が最大の不安である。それを克服するためには、まず働くための実力をつけることだと考え、以前に比べて学業を重視する傾向が強くなつた。ともかく就職先を確保することが先決と考えているが、できるだけ安定したところが望ましく、可能ならばそこで自分の能力を活かしたい

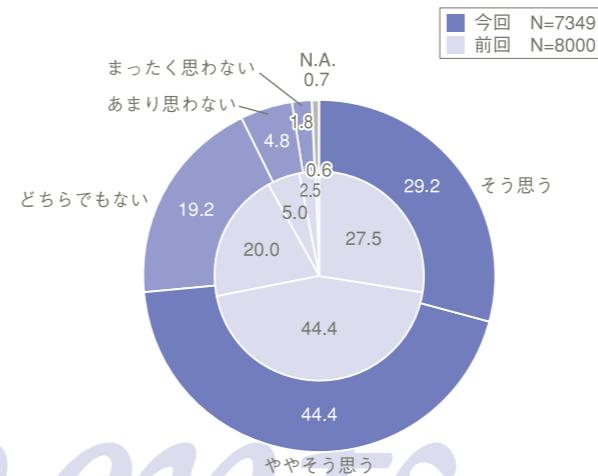
と考えている。このような状況下にあっても「留学」や「ベンチャー」が増加傾向にあることから、進路選択の幅が多少なりとも広がってきていることがうかがわれる。以上の結果から、学生たちが不安を抱きながらも、それに対して真剣に対処しようと努力する姿が浮き彫りになつた。



### ● 視野を広げ、ものごとを幅広く考える力

最も多くの人が「身についた」と評価している力である。この力が子供から大人への成長を示す一つの指標だと考えると、大学がその役割を期待通りに果たしていることがわかる。

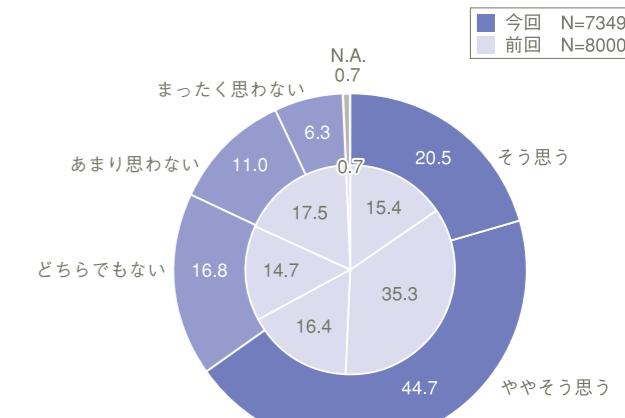
[視野を広げ、ものごとを幅広く考える力がついた]  
(%)



### ● パソコンやインターネットを使いこなす力

この項目は前回調査と比べて14.5ポイントの大幅アップとなった。施設面での充実が効果を上げた典型例であろう。

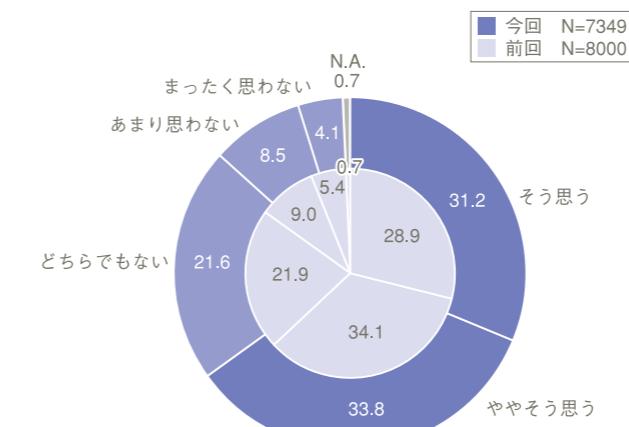
[パソコンやインターネットを使いこなす力がついた]  
(%)



### ● 趣味やスポーツ等によって生活を楽しむ力

60%以上の学生が「身についた」と判断している。特にこの傾向は課外活動を行っている学生において顕著であり、ほぼ80%に達する。一方、課外活動を行っていない学生による評価は40%程度にとどまり、明らかな違いが認められる。これらのことより、大学の役割が学問の教育だけではないことが再認識される。

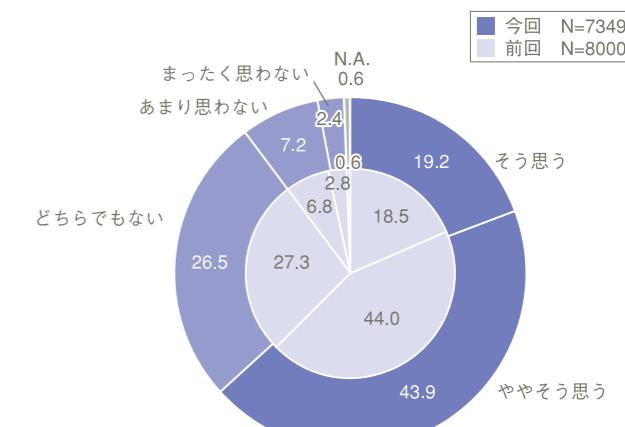
[趣味やスポーツ等によって生活を楽しむ力がついた]  
(%)



### ● 相手の状況や考え方を考慮して話をしたり、対応する力

大半の学生が「身についた」と判断している。この能力はいくぶん抽象的に判断される要素を含んでおり、大学生になって生活の場が広がり、交際相手が多様になることによる当然の帰結とも言える。

[相手の状況や考え方を考慮して話をしたり、対応する力がついた]  
(%)



## ● 専門的知識をもとに論理的に考える力、自分の考えをまとめてわかりやすく表現する力

「論理的に考える力」や「自分の考えをまとめて表現する力」はいずれも約50%の学生が「身についた」と考えている。前回調査と比較すると、「表現力」は3.6ポイントのアップ、「論理的思考力」は4.6ポイント

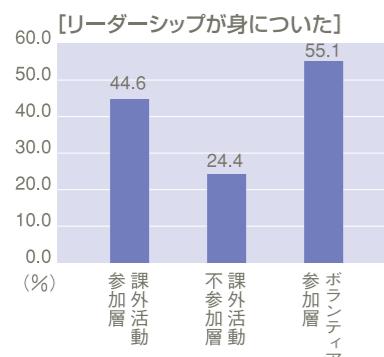


トのアップとなっている。これらは、最近のプレゼンテーション重視の教育や、学生自身の「正課重視」の結果と考えられる。

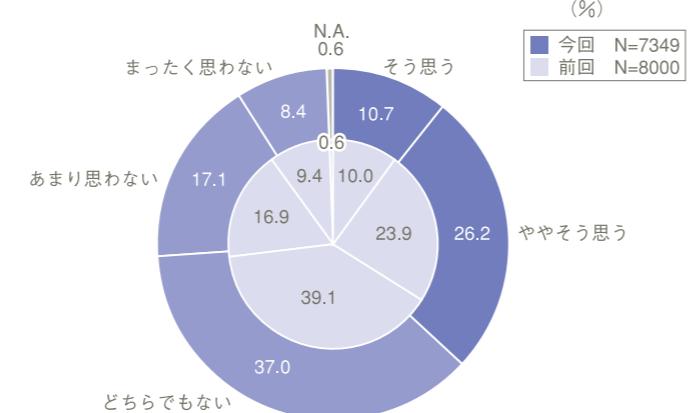


## ● 計画を立て、目標に向かってリーダーシップをとる力

「リーダーシップをとる力」については前回より若干アップしたとはいえ、まだ40%に満たない。特にこの力がついたと評価する学生の割合は、課外活動や、ボランティア活動に参加した学生で高く、前者では44.6%、後者では55.1%に達している。課外活動やボランティア活動がリーダーシップの涵養に重要な役割を果たすことがわかる。



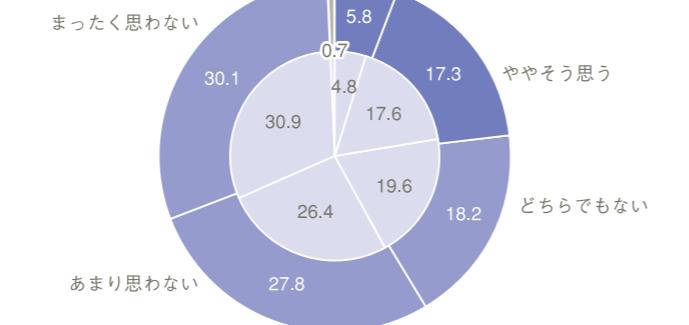
### [計画を立て、目標に向かってリーダーシップをとる力がついた]



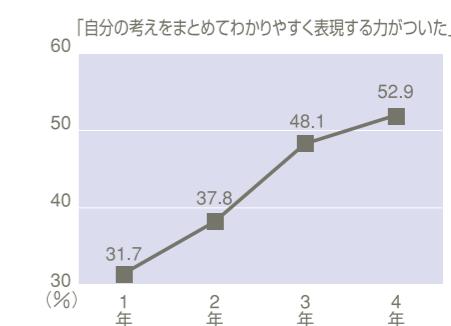
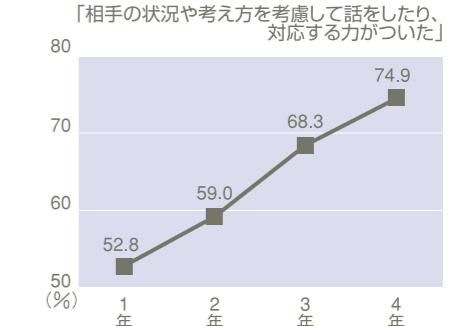
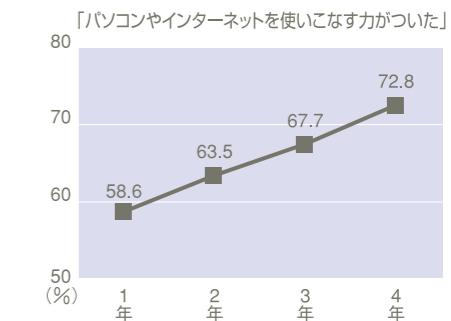
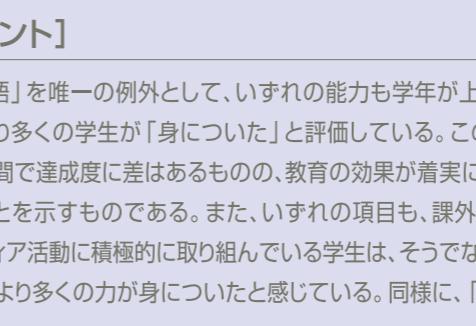
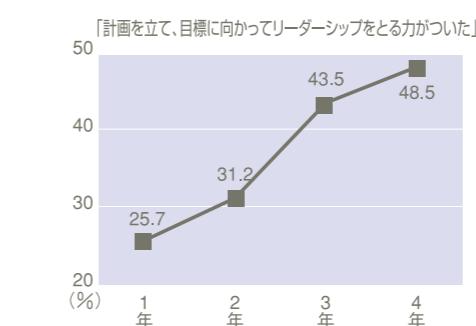
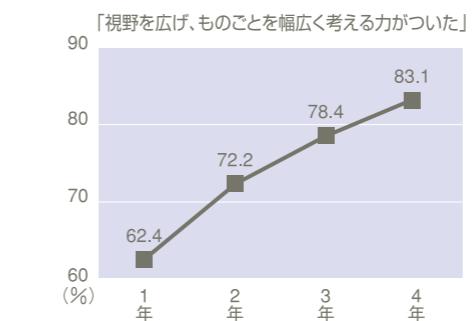
## ● 外国語の本を読んだり、外国語で話をする力

「外国語の本を読んだり、外国語で話せる力がついた」と自己評価する学生は20%程度であり、「大学生活でこれまでに身についたと実感できること」の調査項目の中で最低である。しかも他の項目が学年が上がるにつれて力をつけていると評価されているのに対し、「外国語」だけは高学年になつてもほとんど改善されない。語学教育の難しさと同時に上達を評価・実感せることの難しさが浮き彫りになっている。

### [外国語の本を読んだり、外国語で話をする力がついた]



## 【身についた力の実感】一学年別(そう思う+ややそう思う)



1年	N=1881
2年	N=1875
3年	N=1985
4年	N=1449

## 【コメント】

「外国語」を唯一の例外として、いずれの能力も学年が上がるにつれてより多くの学生が「身についた」と評価している。このことは、各項目間で達成度に差はあるものの、教育の効果が着実に上がっていることを示すものである。また、いずれの項目も、課外活動やボランティア活動に積極的に取り組んでいる学生は、そうでない学生に比べてより多くの力が身についたと感じている。同様に、「所属学部

に入学してよかったです」、「学生生活は充実している」、「授業の内容に満足」と感じている学生ほど、より多くの力がついていると判断している。また、「何でも話せる友人がいる」学生の方が、力がついたと感じる傾向が強い。学生生活、あるいは人生に対する姿勢や考え方方が自己評価に大きな影響を及ぼしているように見える。

## 学生委員会 委員名簿

平成15年7月現在

役名	氏名	大学名および役職等名	
担当理事	長田 豊臣	立命館大学	総長・学長
委員長	大久保 桂子	國學院大学	文学部教授・学生部長
副委員長	越智光一	関西大学	工学部教授・工学部長(平成15年3月辞任)
副委員長	芝田正夫	関西学院大学	社会学部教授・学生部長
委員	武藤元昭	青山学院大学	文学部教授・学生部長
	福士久夫	中央大学	経済学部教授(平成15年3月辞任)
	奥山修平	中央大学	法学部教授・学生部長(平成15年4月就任)
	森田 章	同志社大学	法学部教授・学生部長
	東郷公徳	上智大学	外国語学部助教授(平成15年3月辞任)
	鈴木 守	上智大学	文学部教授・学生部長(平成15年4月就任)
	良永康平	関西大学	経済学部教授・学生部長(平成15年4月就任)
	長谷山 彰	慶應義塾大学	文学部教授・学生総合センター長
	石名坂邦昭	駒澤大学	経営学部教授・学生部長
	中野鐸太郎	明治大学	理工学部教授・学生部長
	大谷津晴夫	南山大学	経済学部教授・学生部長
	石井 進	日本大学	生産工学部教授・総合学生部長
	野澤正充	立教大学	法学部教授(平成14年6月辞任)
	小林 公	立教大学	法学部教授・学生部長(平成14年7月就任)
	井上純一	立命館大学	国際関係学部教授・学生部長
	林 久夫	龍谷大学	理工学部教授(平成15年3月辞任)
	川添泰信	龍谷大学	短期大学部教授・学生部長(平成15年4月就任)
	中島和男	西南学院大学	文学部教授・学生部長
	池本正純	専修大学	経営学部教授・学生部長
	柴田良孝	東北学院大学	文学部教授・学生部長
	早川敦子	津田塾大学	学芸学部助教授(平成15年3月辞任)
	来住伸子	津田塾大学	学芸学部助教授・学生委員会委員長(平成15年4月就任)
	紙屋敦之	早稲田大学	第一文学部教授(平成14年11月辞任)
	岩井方男	早稲田大学	政治経済学部教授・学生部長(平成14年12月就任)

## 学生委員会第一分科会 委員名簿

平成15年7月現在

役名	氏名	大学名および役職等名	
主査	林 久夫	龍谷大学	理工学部教授
委員	本郷茂	青山学院大学	経済学部教授・学生部副部長
	岩田喬	同志社大学	学生支援センター事務長
	大久保桂子	國學院大学	文学部教授・学生部長
	野澤正充	立教大学	法学部教授(平成14年6月辞任)
	松井明子	立教大学	学生部副部長・学生生活課課長
	安食真城	龍谷大学	総合情報ネットワークオペレーションセンター
	加藤哲史	流通科学大学	学生部就職担当部長
	池本正純	専修大学	経営学部教授・学生部長
	石山仁	東北学院大学	学生部学生課課長補佐

## 社団法人日本私立大学連盟加盟大学一覧

(123大学 平成15年7月現在)

愛知大学	城西国際大学	明治学院大学	仙台白百合女子大学
亞細亞大学	順天堂大学	宮城学院女子大学	専修大学
青山学院大学	関西大学	桃山学院大学	芝浦工業大学
跡見学園女子大学	関西医科大学	武蔵大学	白百合女子大学
梅花女子大学	関西学院大学	武蔵野美術大学	園田学園女子大学
文教大学	関東学園大学	長崎外国語大学	創価大学
中京大学	関東学院大学	名古屋学院大学	大正大学
中央大学	活水女子大学	南山大学	拓殖大学
獨協大学	慶應義塾大学	日本大学	天理大学
獨協医科大学	惠泉女学園大学	日本女子大学	東邦大学
同志社大学	敬和学園大学	新潟産業大学	東北学院大学
同志社女子大学	神戸女学院大学	ノートルダム清心女子大学	東北公益文科大学
英知大学	神戸海星女子学院大学	大阪学院大学	東海大学
フェリス女学院大学	國學院大学	大阪医科大学	常磐大学
福岡大学	国際大学	大谷大学	東京医科大学
福岡女学院大学	国際武道大学	立教大学	東京慈恵会医科大学
学習院大学	国際基督教大学	立正大学	東京情報大学
学習院女子大学	駒澤大学	立命館大学	東京女子大学
八戸大学	皇學館大学	立命館アジア太平洋大学	東京女子医科大学
白鷗大学	甲南大学	龍谷大学	東京経済大学
姫路獨協大学	高野山大学	流通科学大学	東京農業大学
広島女学院大学	久留米大学	流通経済大学	東京歯科大学
広島修道大学	共立女子大学	西武文理大学	苦小牧駒澤大学
北海道東海大学	京都産業大学	聖学院大学	東洋大学
法政大学	京都精華大学	成城大学	東洋英和女学院大学
兵庫医科大学	京都橘女子大学	聖力タリナ女子大学	東洋学園大学
石巻専修大学	九州東海大学	成蹊大学	豊田工業大学
岩手医科大学	松阪大学	西南学院大学	津田塾大学
実践女子大学	松山大学	清泉女子大学	早稲田大学
上智大学	松山東雲女子大学	聖心女子大学	四日市大学
城西大学	明治大学	聖和大学	

(大学名ABC順)